

『私は大丈夫』

○登場人物

- ・永田絵美……女優。
- ・沖合文香……大分県の不動産会社勤務。元脚本家志望。
- ・小御門……男性。芸人。

○メモ

舞台上には絵美と文香の部屋が左右に、中間には絵美と小御門が会う喫茶店やオーデイション会場のスペース。

初期、文香の部屋には机も椅子もない。

○1

現在。

絵美が、花火大会の運営者に電話をかけている。

絵美「そのー、昨日の花火が延期されて、今日、開催されることになっていいると思うんですけど。……はい。そうですね。なので、中止にして欲しくて。……はい。中止です。延期とかではなくて、普通に、はい。中止。打ち上げ花火とか、打ち上げなくていいんで(笑)」

少し間が空いて、

絵美「だって、昨日の時点で、延期って決まっちゃったか？決まっちゃったんですよね。私、確認しましたよ。そちらの、公式の「Twitter」も。昨日の朝。そして、普通に、昨日の夜、花火やりますって書いてたじゃないですか。そうですね。で、中止ですってツイートされたの21時ですよ。それ、おかしくないですか？20時の時点で、できないんだったら、その時点で、っていうか、事前に発表できますよね？」

少し間が空いて、

絵美「現地ではアナウンスしてましたって。え、花火って、現地に行かないと見れないんですか？違いますよね。私みたいに、家から花火が見える人だっているんですよ。そうやって、楽しみに待っている人がいるんですよ。そういう人たちって、例外なんですか？違いますよね」

少し間が空いて、

絵美「今日見れますから、大丈夫ですよって何ですか。……今言ったじゃないですか。今日、見れるから大丈夫ですよーって。そうじゃないでしょ。昨日見れなかった人だって、いて。……いるんだよ！なんで、切り捨てんの？なんで平気で無視すんの？なんで、そういう人は見捨てて、誰かを楽しませてあげようとか、偉そうに思っちゃってんの？……なんで、そうやって簡単に、大丈夫とか言うの。何も知らないでしょ。知らないくせに、わかるうともしてないくせに、大丈夫とか言わないでしょ」

○2

一年前。

絵美、スマホを持って、椅子に座っている。

机には、水が入ったコップ。

マネージャーに電話をかけようか迷っている。

絵美、水を飲もうとコップに手を伸ばす。

画面をちゃんと見ずに、着信ボタンを押す。

絵美、間違えて、文香に電話をかけてしまう。

電話の着信音。

絵美「(水を飲みながらスマホを見て)……んん！(少し噴き出す)」

文香、床に座って、パソコンを見ている。

少しだけ離れた場所に置いたスマホが、鳴っている。  
床を拭くのが先か、電話をどうするのか、コップはどこに置こう、などとにかく慌て  
ている絵美。

首を傾げている文香、電話に出る。

文香「（様子をうかがっている）……」

絵美「（電話に出ってしまったことに驚き、スマホを凝視して）……」

文香「……」

絵美「（恐る恐るスマホを耳につけて）……あ、もしもし」

文香「もしもし」

絵美「えーっと、文香？」

文香「うん。そうだけど」

絵美「今忙しい？忙しいよね」

文香「……なんで？」

絵美「いや理由は無いんだけど。忙しいのかなーって思っただけ、だからー」

文香「……忙しいと思ったのに、電話かけたの？」

絵美「違う違う違う」

文香「じゃあ、なんで？」

絵美「いや、うーんと。そのー」

文香「……」

絵美「うーんと……」

文香「間違えたでしょ？」

絵美「……」

文香「絶対間違えたでしょ」

絵美「違うって」

文香「誰にかけようと思ったの？」

絵美「……マネージャー」

文香「そうだよ。そうだと思った」

絵美「ごめん」

文香「これさ」

絵美「ん？」

文香「私が、電話に出たのが、変じゃない？」

絵美「違うよ。私が」

文香「明らかに私じゃないのに。なんか出ちゃったから」

絵美「そうじゃないって」

文香「ごめん」

絵美「謝らないですよ。私がいけないんだから」

文香「……」

絵美「……いけないとかじゃ、ないけど」

文香「……うん」

絵美「ほんとごめん。忙しいのに」

文香「大丈夫。大丈夫」

絵美「……ごめんね」

文香「ううん」

絵美「じゃあ……切るね。ごめん。ほんと」

文香「……うん」

絵美、電話を切る。

文香、スマホを（画面が見えないよう床に面して）置いて、パソコンの作業に戻る。

絵美「（溜息）……（頭を搔く）」

絵美、机にスマホを置いて、床を拭き始める。

絵美、ふと思いついて、スマホを手に取り、文香にLINE。

文香のスマホに、通知音。

文香「（スマホを見て）（気になって画面を見る）……。 （返信する）」

絵美のスマホに通知音。

絵美「（スマホを見て）……。 （文香に電話をかける）」

電話に出る、文香。

文香「……（戸惑っている）」

絵美「（少し笑いそうになりながら）あー、すごい変だとは思っただけど」

文香「……う、ん」

絵美「あー、野島伸司って知ってる？」

○ 3

喫茶店みたいなどこ。

絵美、座って、飲み物を飲んでいる。

しばらくして、小御門がやってくる。

小御門「（絵美を発見して）（ニヤニヤしながら、少し早いスピードで、絵美の対面の席に座る）」

絵美「（ほぼ同時に）……久しぶり」

小御門「（ほぼ同時に）元気？」

絵美「あー、うん。元気」

小御門「俺も元気」

絵美「（苦笑）……どうする？（メニューを取り出して）なんか飲む？私、注文しちゃったから」

小御門「何飲んでるの？」  
絵美「ん？あ、アイスクリームラテ？みたいな」  
小御門「へー、いいねー」  
絵美「うん。美味しいよ」  
小御門「うんうんうん。そんな感じだよね」  
絵美「……（小御門を不審に思ってる）」  
小御門「（気づいて）……ん？」  
絵美「……いいの？注文しなくて」  
小御門「（周りを見て）んーうん。取りあえず、いいかな」  
絵美「……」  
小御門「それでさ」  
絵美「うん」  
小御門「最近は一、どんな感じなの？」  
絵美「最近って、私が？」  
小御門「うんうん」  
絵美「どんな感じって……まあ、ぼちぼち、みたいな」  
小御門「あれ見たよ。転職サービスのCM」  
絵美「あーうん。あの、さって通り過ぎるやつね。なんも台詞ないんだけど」  
小御門「そうそう」  
絵美「……うん」  
小御門「（じつと絵美を見ている）……」  
絵美「小御門くんは？」  
小御門「あ、俺？」  
絵美「……うん」  
小御門「んー、うん」  
絵美「芸人？の仕事とか、どんな感じなの？」  
小御門「あーもう、コントはやってないよ」  
絵美「……あ、そうなんだ」  
小御門「半年前くらいから、もうやってない」  
絵美「そう、なんだ」  
小御門「うん」  
絵美「じゃあ、漫才？」  
小御門「漫才なんかやるわけないじゃん（苦笑）。こっちはコントやりたくて、仕事してんだから」  
絵美「……そっか。そうだよね」  
小御門「うん」

絵美「……でも、大変だよ。やっぱり。こういうの」

小御門「(笑って) あ、そういうことじゃないよ」

絵美「……。じゃあ、どういう、こと？」

小御門「戦略的、撤退」

絵美「え？」

小御門「前にも言ったことあると思うけど、俺さ、木下ほうかになりたいんだよ。あーま

あ、キャリア的にだけど」

絵美「木下ほうか？」

小御門「知らないよね。あのー、スカッとジャパンとか」

絵美「あー。もしかして、イヤミ課長？」

小御門「そうそう。メジャーだね」

絵美「そっか。その人尊敬してるんだ」

小御門「キャリア的にね」

絵美「う、ん」

小御門「だって、キャリアとか？演技とか？違うと思うから」

絵美「あ、木下ほうかさんも、芸人から俳優さんになったってこと？」

小御門「んー、厳密に言うると少し違うんだけど、そう。まあ、そんなところ」

絵美「へー」

小御門「そうそう」

絵美「……じゃあ、小御門くんも、俳優？になるってこと？」

小御門「そうそう」

絵美「へー、すごいねー」

小御門「なんかさ、そっちのほうに向いてると思うし。そっちの方が売れるの、簡単だと思  
んだよ」

絵美「……んー」

小御門「だってさ、CM出てるでしょ」

絵美「(苦笑) ……そうだけど。でも事務所のパワーだから」

小御門「うん。そうだよ」

絵美「う、ん」

小御門「でも、すごいよね。ほんと」

絵美「んー(首を傾げる)」

小御門「だからさ、マネージャー紹介してくんない？」

絵美「……え？」

小御門「マネージャー、紹介してくれない？」

絵美「……なんで？」

小御門「俳優になりたいって話したでしょ」

絵美「聞いたけど」

小御門「うん」

絵美「え？……事務所に入りたいたってこと？」

小御門「ストレートに言えばね」

絵美「でも、もう事務所入ってるでしょ。芸人の」

小御門「苦笑」

絵美「話してたよね。前に。なんか、良い感じの事務所（※）だった」

小御門「（※から）あのさ、芸人の芸人のって。何？さっきから。そんな垣根ないでしょ。

別に。おんなじでしょ。みんな。え？そうだよね？」

絵美「……え。ご、めん。そんなつもりじゃなかった（※）んだけど」

小御門「（※から）やめたよ」

絵美「……え？」

小御門「やめたよ。事務所」

絵美「……あ、そうなんだ」

小御門「うん。だから、大丈夫でしょ」

絵美「でも……コンビは？解散したの？」

小御門「トリオね。解散したよ」

絵美「そう、なんだ」

小御門「あ、そういうこと？」

絵美「……ん？」

小御門「信用の話、今してる？」

絵美「してないけど」

小御門「絶対そうでしょ。え、そんな信用できない？別に、事務所もトリオも、なんかあつ

たからやめたわけじゃないんだけど。自主的に。言ったでしょ。戦略的撤退って」

絵美「……」

小御門「言ったでしょ？」

絵美「あの一、一回私が喋ってもいい？」

小御門「どうぞ。さっきからも、ずっとそうだけど」

絵美「……うん」

小御門「いいよ」

絵美「……うん。……なんだろう。まず、その、結論から、言う」と

小御門「うん」

絵美「力に、なりたいたけど……なれないと思う」

小御門「どうして？」

絵美「私、小御門くんも知ってると思うけど、貢献できてないんだよ。全然。事務所に。だから、私の紹介で誰かを入れることなんてできないし、それは小御門くんだから、とかじ

やないから。……それに、小御門くんのためにもならないと思う。こういうのって。だって、私の窓口じゃ、そういう風に見られるから」

小御門「……」

絵美「……」

小御門「ごめん……。なんか」

絵美「……これ、私が、ごめんって話だから。私が、もっと、ね。なんか」

小御門「ごめん。辛いこと言わせちゃって」

絵美「そんなことないから」

小御門「でも、大丈夫だよ」

絵美「……え？……何が？」

小御門「自分の価値くらい？自分で、わかってるから」

絵美「……えっと、だから？」

小御門「だから、紹介してくれて大丈夫だよって話」

絵美「……えー（苦笑）」

小御門「それに、絵美の紹介で入ろうなんて、最初から思っていないよ。それくらい外から見てもわかるから。だから、俺、最初に言ったでしょ。マネージャー紹介してくれないって」

絵美「……う、ん。だけど」

小御門「だから、大丈夫。そこからは自分でやるから」

絵美「……」

小御門「いいでしょ？」

絵美「……。えー」

小御門「駄目？」

絵美「駄目……とかじゃないけど……」

小御門「よかったー。（振り返って、店員を呼ぶ）すみませーん」

メニューを取る、小御門。

ちらっと、絵美の飲んでるものを見て、

小御門「（店員に）普通に、アイスコーヒー」

○4

時系列は、2の続き。

絵美と、文香が電話している。

文香「高校教師は？」

絵美「あー、なんかタイトルは聞いたことあるかも」

文香「じゃあ……あ、家なき子は？」

絵美「……あ。知ってる知ってる。安達祐実の」



文香「そうそう。あれも野島伸司。……あ、でも、企画と原案だけで脚本は違う人だけども、代表作は……そんな感じ、なんじゃないかな？」

絵美「……え。めちゃくちゃ有名じゃん」

文香「だから、さつきから、有名って言ってるよ」

絵美「知らなかった」

文香「んー(笑)」

絵美「全然知らなかったんだけど」

文香「ていうか、自分で調べない？ こういうの。普通」

絵美「そう、だよ」

文香「……うん。だって、気になるでしょ？」

絵美「……んー、うん」

文香「あんまり、気にならない、タイプ？」

絵美「……うん」

文香「そっか(笑)」

絵美「ごめん(笑)」

文香「いや、私はいいんだけど」

絵美「うん」

文香「でも、よかったね。逆に」

絵美「え？」

文香「マネージャーさんに電話する前で」

絵美「それはそうだね。……うん」

文香「ん？」

絵美「いや、そうだよ。うん」

文香「その、オーディションって」

絵美「うん」

文香「どうい……感じなの？」

絵美「えっと、なんか、別に野島伸司さんが、何か作品を作ろうとして、のオーディションじゃなくて。ワークショップの、オーディション、みたい」

文香「あ、そうなんだ」

絵美「だけど、それに選ばれたら、ドラマとか出れるよねって、事務所の人が言った」

文香「あ、だから、よくわからないけど、受けてみよう、的な」

絵美「的な(笑)」

文香「それは……どうなんだろう？」

絵美「うん……」

文香「その、あんまり、モチベーション沸かないって感じ……なの？」

絵美「……うん。そんなことない。やらないといけないし」

文香「……そっか。なら、何でもいいから、野島伸司さんが書いたドラマとか、見たほうが  
いいんじゃない？ 雰囲気掴むためにも」

絵美「うん。そう、だよね」

文香「うん」

絵美「……」

文香「マネージャーさんは、なんか言ってくれたりとかしてないの？」

絵美「んー、特に」

文香「……そっか」

絵美「あと、そんな私に関心ないから」

文香「でも、電話して相談できる人、なんでしょ？」

絵美「んーそれもどうだろ。相談しても面倒くさいって思われるだろうし。だから、文香に  
聞いた方がいいのかなって思いつきで、思って。だって、こいついちいちこんなことで電  
話してくんのかーって思われながら、相談乗って欲しくないし」

文香「それは、そうだね」

絵美「うん」

文香「……でも、なんだろ。その、オーディションで自己アピール？ みたいなこと、するっ  
てことだよな？」

絵美「うん。そうそう。あと、演技するみたい。台本渡されて」

文香「え。その場ですってこと？」

絵美「ううん。後で送ってくれるって」

文香「マネージャーさんが？」

絵美「うん……」

文香「そっか。それ、見てないし、本人のことも……わかんないんだけど」

絵美「うん」

文香「嘘つかないほうが、いい、と思う」

絵美「うん」

文香「イメージだけど」

絵美「うん。なんか、そういうの助かる。……じゃあ、何でも隠さずにつてこと？」

文香「う、ん。なんか、なんだろ。どうせ、バレちゃうと思うし」

絵美「そうだね」

文香「嘘つくよりも、そのままの私でどうぞってされるほうが、きっとこれは誰でもかもし  
んないけど、嬉しい？ と思うから」

絵美「嘘つかないと、空っぽな人でも、そうしたほうがいいんだよね？」

文香「……（笑う）。どういうこと？」

絵美「……何でもない（笑う）」

文香「……空っぽでも、空っぽですって、言うしかないよ。もう」

絵美「もうって」  
文香「いつなの？オーディション」  
絵美「えっと……4日後？」  
文香「うっわ。緊張してきた」  
絵美「うっわって」  
文香「でも、まだ来てないんだ。台本」  
絵美「……うん」

○5

駅前。

絵美と小御門がいる。横に並んで。

小御門、紙袋を持っている。

絵美「ごめん」  
小御門「ううん」  
絵美「でも、佐伯さん悪い人じゃないから」  
小御門「うん。それは、わかった」  
絵美「うん」  
小御門「ありがとう。今日」  
絵美「(戸惑って)……」  
小御門「ん？」  
絵美「……ううん」  
小御門「(紙袋を絵美に渡す) はい」  
絵美「(紙袋を見て) なに？」  
小御門「紹介してくれたから」  
絵美「あ……ありがとう？(紙袋を見る)……DVD？」  
小御門「解散ライブのDVD。単独の」  
絵美「……あ、小御門くんのこと？」  
小御門「音質よくないんだけど、声は聞こえるから」  
絵美「……(苦笑) あ、ありがとう？」  
小御門「あ、メルカリで転売とかしないでね。すぐわかるから」  
絵美「……しないよ(苦笑)。見るよ。ちゃんと」  
小御門「……ほんと？」  
絵美「うん。見る見る」  
小御門「……」  
絵美「……」  
小御門「台本の話……してたけど」

絵美「え？」  
小御門「さっき。佐伯さんと」  
絵美「あー、オーデイションの」  
小御門「オーデイション？」  
絵美「そう。オーデイションの。台本送ってくださいって」  
小御門「あ、へー」  
絵美「うん」  
小御門「いけそう？」  
絵美「わかんない。見てみると、台本」  
小御門「そっか」  
絵美「うん」  
小御門「(財布から写真を取り出し、渡す) はい」  
絵美「(戸惑いながら写真を受け取る) ……なに？あ、…ライブの？」  
小御門「そう。解散した時の」  
絵美「へー」  
小御門「(自分を指指す)」  
絵美「あー(笑) うんうん。わかるわかる。これが小御門くんだよね」  
小御門「うん」  
絵美「うん」  
小御門「笑ってる？」  
絵美「うん」  
小御門「…笑ってる？」  
絵美「うん。…ありがとう(写真返す)」  
小御門「あげる」  
絵美「え？」  
小御門「あげる、それ」  
絵美「…」  
小御門「大丈夫。大丈夫」  
絵美「え、でも」  
小御門「非売品とかじゃないから」  
絵美「…あ、え(苦笑)」  
小御門「だから、もらって」  
絵美「…あ、ありがとう？」  
小御門「うん」

絵美「(戸惑いながら)……(写真を紙袋に入れようと)」

小御門「あ、そこじゃなくて。財布に」

絵美「……あ、そう、だよな?」

小御門「うん。なくすといけないから」

絵美「……うん」

○6

駅前。

絵美、マネージャー(佐伯)と電話をしている。

絵美「あ、お忙しいところ、すみません。あのー、まだ、台本が届いてなくて。はい。あ、それじゃないです。私出てないので。はい。あの、野島伸司さんのワークショップの、はい。あ、そうです。そうです。オーディションの、台本を……」

少し間が空いて、

絵美「明日です。はい。……はい。すみません。あの、お忙しいと思ったので。……すみません。そうですよね。すみません、でした。はい。あ、確認します」

絵美、スマホを耳から離して、メールを見る。

佐伯からメールが来ていたことを確認して、電話に戻る。

絵美「確認しました。ありがとうございます。はい、見れました。……はい、わかっています。……頑張ります。思っています。ちゃんと。……はい」

絵美、電話を切る。

絵美、急いで帰宅する。

○7

絵美、文香と電話をしている。

文香、床に座って、パソコンの画面を見ている。

絵美の部屋に、小御門からもらった紙袋がある。

紙袋はそのままの状態で、床に置かれている。

文香「……あ、二回目に来たメールの方?」

絵美「あ、ごめん。焦って、二回送っちゃったかも」

文香「あ、大丈夫。大丈夫。……こんな感じなんだ」

絵美「……うん」

文香「これって、いつ来たの?」

絵美「さっき」

文香「……え?」

絵美「さっき、佐伯さん……マネージャーさんに送ってもらって」

文香「でも、オーディション明日だよな?」

絵美「うん」  
文香「おかしいじゃん。それ。忘れてたってこと？」  
絵美「うん。私が」  
文香「……違うでしょ。佐伯さんが忘れてたんでしょ？」  
絵美「私が早く連絡しなかったから。まだ来てませんって。だから、こうなったただけだから」  
文香「絵美だけの責任じゃないでしょ」  
絵美「でも、大丈夫だから。別に、覚えなくてもいいんだし」  
文香「でも、事前に送られてきてるわけ、だから」  
絵美「うん。そうだよ。よくないよね」  
文香「……わかんない。オーディションの仕組み？とかよく知らないから」  
絵美「よくないよ。全然」  
文香「……」  
絵美「だって、最低限でしょ。台詞覚えるの。ていうか、みんな覚えてきてるはずだし。私  
だけ、明日浮いて見えるよね。絶対、悪い意味で」  
文香「でも、そんな分量ないから」  
絵美「うん。だから、大丈夫って言ってるじゃん！」  
文香「……うん」  
絵美「……ごめん。あんまり、余裕なくて」  
文香「うん」  
絵美「ごめん。ほんと」  
文香「取りあえず、読んでみてもいい？通して」  
絵美「うん」  
文香「(送られてきた脚本を読んでいる)……」  
絵美「……」  
文香「でも、まさか野島伸司さんの脚本見れるなんて」  
絵美「……ごめん。付き合わせて」  
文香「ううん。すごい、貴重だし」  
絵美「……ごめん」  
文香「ううん」  
少し間が空いて、  
絵美「……実はさ」  
文香「……ん？」  
絵美「……ごめん、話してもいい？」  
文香「うん。いいよ」  
絵美「佐伯さんから、これで最後だよって、言われて」  
文香「……最後って？」

絵美「こういう機会、振ってあげるの、最後だよって、言われてて」  
文香「……そっか」  
絵美「だから、頑張らないといけないのに……」  
文香「……うん」  
絵美「なんか、あんまり、頑張れない」  
文香「……うん」  
絵美「なんで、そうなのか、わかんないんだけど」  
文香「わかるよ。なんか、そういうの」  
絵美「……なんでかな？……だって、こういう仕事したくて、頑張ってるのに。なんで、頑張れないんだろ」  
文香「……うん」  
絵美「……ごめん。なんか、変な話、しちゃって」  
文香「ううん。変な話じゃないよ」  
絵美「……うん」  
文香「私も、脚本もう書いてないんだよね」  
絵美「……え？」  
文香「ごめん。なんか、私の話、しないようにしようって思ってたんだけど」  
絵美「ううん。そんなことない」  
文香「……だから、今大分県で、不動産の営業？しちゃってる」  
絵美「え？東京にいないの」  
文香「うん。いない」  
絵美「……知らなかった」  
文香「うん。……誰にも、言っていないから」  
絵美「……え？」  
文香「ごめん。変なこと言って」  
絵美「変なことじゃ……え、なんか、すごい話」  
文香「びっくりした？」  
絵美「びっくりした」  
文香「だよ。自分でも思うもん。びっくりだなーって」  
絵美「どうして、大分県なの？九州？……九州だよね？」  
文香「うん。九州九州。お母さんの実家が、大分で」  
絵美「あー、そっか」  
文香「それで、そう、そういうことになって」  
絵美「お母さんは？元気？」  
文香「……うん。元気。元気。すごい元気」  
絵美「すごい元気なんだ」

文香「うん」

絵美「えー、そっかー。大分かー」

文香「うん」

絵美「大分かー」

文香「うん。だから……あれ、私なんの話、しようとしてたんだっけ？」

絵美「ん？」

文香「あ、そう。だから、私みたいに、頑張れないって、絵美はまだ決めつけないでしょ？」

絵美「……うん」

文香「だから、まだ、そんなに、思わなくても。誰にも、わかんないし。自分のことも、自分でわかんないし」

絵美「……う、ん」

文香「……読み終わった」

絵美「どうだった？」

文香「面白いけど、やる方は……ねって言う」

絵美「……うん」

文香「じゃあ、私が、男の人の役やるから」

絵美「うん。……ありがとう」

○ 8

オーディション会場。

絵美は座って、台本を読み込んでいる。

遅れて、絵美の隣に座る、小御門。

絵美、小御門が来たことに、気づいていない。

小御門、声のボリューム、抑え気味に、

小御門「絵美」

絵美「(驚いて)……え？」

小御門「(台本を持って) これってさ、二人組で部屋に入って、オーディションするってことだよな？ 台本的に」

絵美「なんで、いるの？」

小御門「え？」

絵美「え、じゃなくて」

小御門「俺と佐伯さんと絵美で、話したじゃん」

絵美「うん。話したよ」

小御門「で、佐伯さんと連絡先交換させてもらって、で、帰りに、今日はありがとうございました、みたいなLINEして。そうそう。絵美がなんかオーディションの台本の話、してたじゃん。佐伯さんと別れたあと」



絵美「(察して)……」

小御門「え?もう忘れちゃった?」

絵美「覚えてるよ」

小御門「だから、そのオーディションの話?聞いてみたら、台本送ってくれて。もし興味あったら参加してみたらーって言ってくれて」

絵美「……そう、なんだ」

小御門「この話、してなかったっけ?」

絵美「されてないよ」

小御門「そっか。なんか、でも俺、聞かれないと話さないタイプだから」

絵美「(台本を読む) うん」

小御門「でもさ、絵美って、すごい恵まれてるよね」

絵美「うん」

小御門「あんな、親切なマネージャーさんと一緒に、こうやって仕事できてさ」

絵美「うん」

小御門「いいなーって、思っちゃうよねー。正直」

絵美「うん」

小御門「(参加者を数え始める)……あ、なんだー。絵美と一緒にじゃないかも」

絵美「座った順番じゃないでしょ」

小御門「あ、へー、そうなんだ。俺知らないから。そういうの」

絵美「うん」

小御門「でも、頑張ろうね」

絵美「……うん」

小御門「お互いね」

○9

文香、会社の上司と電話をしている。

文香「あのー、今朝話されていた……あ、はい。企画のコンペの話なんですけど、はい。あの、営業の人間でも参加することは可能なんですか?……はい。なんていうんですか、そのーチャレンジ?してみたいなーと思ってます。……あ、いや、そうですね。はい。現時点で、何か思いついてるわけではないんですけど。……あ、はい。わかりました。はい。とりあえず、じゃあ、はい、形にしてみます」

文香、メモを手にしながら、

文香「(メモに書きながら)……はい。……はい。……はい。じゃあ、来週とかに……はい。そうします。もう、プレゼンの形式にするって感じ、ですかね?……あ、わかりました。じゃあ、取りあえず、今週中に、企画書にするので、はい。わかりました。お願いします。はい、ありがとうございます。……(笑う)頑張ります。ありがとうございます」

絵美と文香、電話をしている。

絵美「え?…:…:…:なんで、椅子ないの?」

文香「(周りを見渡して)理由とかはないんだけど」

絵美「でも、必要じゃん」

文香「それは、人によるでしょ」

絵美「え?必要だから。椅子。だって、座りたいって思ったら、どうすんの?」

文香「座るよ。床に」

絵美「痛いでしょ」

文香「痛いっていうか、冷たい」

絵美「だから、買えば良いじゃん」

文香「なんか、気が進まないんだよね」

絵美「なんで?」

文香「だから、理由なんかないの」

絵美「ていうか、買わなくてもいいじゃん。リビングあるでしょ?」

文香「リビングはありますー」

絵美「そうじゃなくて。お母さんと二人で暮らしてるわけだから、一個くらい」

文香「え?お母さんの椅子、取って来ちゃうってこと?」

絵美「(笑う)」

文香「お母さん、立って、夕食食べることになるんだけど」

絵美「だから、買えばいいじゃん」

文香「だから……:(笑う)」

絵美「ねー、面白い話していい?」

文香「ハードル上げたな。勝手に、自分で」

絵美「最近、小御門くんと会ってるの」

文香「……:え?…:…:小御門くんって、あの小御門くん?」

絵美「高校の、同級生の、小御門くん」

文香「……:え。…:…:なんで?…:…:いつから?」

絵美「きっかけは……:…:なんか、会えない?みたいなLINEが来て」

文香「なんだ、そのきっかけ。え、行ったの?」

絵美「最初は、行くのどうしようかなーって思ってた。ていうか、全然今まで?数年間くらい?」

会ったりやりとりもしてなかったから、断ろうと思ったんだけど。なんか、必死、で」

文香「必死?」

絵美「うん。なんか、昼でいいし、1時間でもいいからーみたいな。喫茶店で待ち合わせして、」

話せればいいからーって。なんか、それが必死に見えて、断れなくて」

文香「それで、会ったってこと?」

絵美「うん。でもさ、遅れてきたんだよ。小御門くん」  
文香「え？」  
絵美「なんか、三十分くらい遅れてきて。私、待てないから、もう注文しちゃってさ。で、なんて言われたと思う？小御門くんから」  
文香「なんか、怖いな。え。……なに？」  
絵美「事務所入れてくれないって？」  
文香「……え」  
絵美「えって感じだよねー」  
文香「あー、芸人辞めてー」  
絵美「そうそう。俳優になりたいから、マネージャー？紹介してくれないって」  
文香「なんか、嫌だね。待たされた挙げ句に」  
絵美「そう。挙げ句にー、それだったからー」  
文香「それで、紹介してあげたの？」  
絵美「……するわけないじゃん。紹介なんか」  
文香「ま、そうだよね」  
絵美「でも、それが、オーディションにさ、来てて」  
文香「え？……小御門くん？」  
絵美「そう」  
文香「なんで？」  
絵美「なんでかなー」  
文香「ツテとか、あったってこと？」  
絵美「そうかもねー」  
文香「へー、……そうなんだ」  
絵美「でも、なんか、お互い頑張ろうねって言われたー」  
文香「嫌だった？」  
絵美「うん（笑）」  
文香「なんか、酔ってる？」  
絵美「え？酔ってないけど」  
文香「でも、なんか、よく喋るから」  
絵美「なにそれ」  
文香「あんまりいつも思ってること言わないから」  
絵美「言ってるよー、いつも」  
文香「なんか、嫌な感じでは話さないじゃん。誰かが話してたら、たまに乗っていくけど」  
絵美「そんなに、でも、話したことないでしょ。私と文香って。最近話すけど」  
文香「二人はなかったよね」  
絵美「そうだよね。まあ、なんか、同じクラスだったけど、人数多かったし」

文香「複雑だったし」  
絵美「だった。だったー」  
文香「思い出したくないよね」  
絵美「もう覚えてないもん」  
文香「ひっど」  
絵美「でも文香だつてさ、思ってること言わないじゃん」  
文香「そんなことないし。言ってるし」  
絵美「私よりは言ってるか……」  
文香「なんで急に落ち込んでんの？」  
絵美「だって、私よりは、言えてるなって思ってる」  
文香「反省しないでよ。急に」  
絵美「ごめん(笑)」  
文香「ていうか、全然話してくれないじゃん。オーディションの話」  
絵美「……あー、うん」  
文香「まだなんでしょ。結果は」  
絵美「うん。まだ」  
文香「じゃあ、いいじゃん。感想くらい」  
絵美「んー、でも、面白い話はないよ？」  
文香「台詞は？」  
絵美「あ、うん。ちゃんと頭入ってる状態で、できたはできた」  
文香「そっか。よかったじゃん」  
絵美「うん。だけど……なんか、ずっと、これで合ってるのかなーって思いながら、思ったら、終わっちゃったって感じかな」  
文香「手応えはなかった？」  
絵美「ない。ない。そんなの。でも、時間があればーって話でもない気がするから。なんか、ショックとかは、ていうか後悔？はないかも。まあ、ないといけないんだけど」  
文香「そっか……野島伸司さんとは、話せたの？」  
絵美「うん。なんか、その事前に提出？した履歴書？みたいなを見て、質問された」  
文香「なんて、質問された？」  
絵美「んーなんか(笑)」  
文香「なに」  
絵美「今までやってきて、こういう仕事？辞めようって思ったことはありませんかって」  
文香「……なんて、答えたの？」  
絵美「ん？んー、秘密」  
文香「うっわ」  
絵美「もう覚えてないし」

文香「ほら」

絵美「なに」

文香「言わないじゃん。ほんとの部分は」

絵美「だって、文香が言ったじゃん。嘘つかないほうがいいって、嘘ついてても、どうせばれるって」

文香「(笑う) それ、採用してくれたんだ」

絵美「だから、なおさら、言えないでしょ」

文香「そっか。それもそうか」

絵美「うん(笑)」

文香「でもさ、もしオーディション落ちても」

絵美「落ちた前提やめてくんない？まだ結果出てないんだから」

文香「仮定だから。もしもー」

絵美「だから、それをやめてって」

文香「こっちに来てよ。大分」

絵美「なんで？(笑)」

文香「実は、なんか今、仕事で、企画のコンペ？みたいなのに、挑戦しようかなって思ってた」

絵美「えーすごいじゃん。え？なんのコンペ？」

文香「住宅展示場の、なんだろ。イベントの、企画案みたいなの、社内で募集しててー」

絵美「へー、そうなんだ」

文香「だから、もしコンペ通ったら、出てよ」

絵美「誰が？」

文香「絵美が」

絵美「絶対いらないでしょ。私」

文香「だって、暇になるんでしょ？」

絵美「あー、考えたくないー」

文香「なんか、なんかしらで、手伝ってよ」

絵美「えー」

文香「落ちたら」

絵美「なんか嫌だなー」

文香「そこは素直」

絵美「え？どんな感じの、考えてんの？」

文香「最終日の、日曜日の、夜に、打ち上げ花火がばーんって」

絵美「え？住宅展示場で？」

文香「そう」

絵美「住宅展示場で、花火？」

文香「そう」  
繪美「無理でしょ」  
文香「そういうこと言わない」  
繪美「だって、無理でしょ。なんか、法的に。聞いたことないし」  
文香「聞いたことないからこそ、でしょ」  
繪美「うっわ。クリエイターぶってるー」  
文香「……あ！」  
繪美「怒った？」  
文香「怒った」  
繪美「ごめん」  
文香「素直」  
繪美「でも、だったらなおさら、椅子買いなよ」  
文香「うっぎ(笑)」

○ 1 1

喫茶店。

小御門が座って、何か飲んでいる。

遅れて、繪美が現れ、座る。

繪美「今日は早いなだね」

小御門「大丈夫？」

繪美「え？」

小御門「なんか、大丈夫？」

繪美「……大丈夫だけど」

小御門「なんか、焦ってるように見えたから」

繪美「あー、え？焦ってはないんだけど。……でも、小御門くん遅れてくると思ったから」

小御門「びっくりした？」

繪美「……うん」

小御門「いつも遅れるわけじゃないからね。俺もね。さすがにねー」

繪美「……そうだよね」

小御門「(メニューを渡して) なんか飲む？」

繪美「(受け取って) うん」

小御門「ねえ」

繪美「(メニューを見ている) ん？」

小御門「なに飲んでると思う？」

繪美「え？(顔を上げる)」

小御門「なに飲んでると思う？」

絵美「……何だろ？カフェオレ？」  
小御門「アイスクラメルラテ」  
絵美「……へー。いいね」  
小御門「前、注文してたでしょ」  
絵美「……そうだった？（手を挙げ、注文している）」  
小御門「（店員を見ている）……（にやにや）」  
絵美「（注文終わって）（小御門見て）……え。なに？」  
小御門「金髪のわりに、黒髪みたいなモチベーション」  
絵美「……え？なにが？」  
小御門「……」  
絵美「ごめんね。今日あんまり時間なくて」  
小御門「うん。いいよ。全然」  
絵美「……んー。……うん」  
小御門「絵美のさ、宣材写真って……」  
絵美「（様子をうかがいながら）……うん」  
小御門「なんか……いいよね」  
絵美「……（苦笑）え。ありがとう？」  
小御門「あれって、事務所で？」  
絵美「あー、違うよ」  
小御門「知り合いの人ってこと？」  
絵美「うんうん。そうそう」  
小御門「へー、そうなんだ（スマホで絵美の宣材写真を見ながら）」  
絵美「……うん」  
小御門「へー」  
絵美「……気になる？」  
小御門「いや、なんだろ。参考にしたいなーって思ってる」  
絵美「……私なんか参考にするより、なんか、他の人の参考にした方がいいよ」  
小御門「他の人って？」  
絵美「え？……んー、いや小御門くんのことだから、わかんないけど」  
小御門「（写真見ながら）（指指して）このさ（絵美に見せる）」  
絵美「（見て）うん」  
小御門「なんでさ、ちょっとここ膨らんでんの？」  
絵美「え。どこ？」  
小御門「ここ」  
絵美「（見て笑う）……」  
小御門「（絵美見て）え？」

絵美「気になる？」  
小御門「気になる」  
絵美「なんで？」  
小御門「なんか膨らんでるから」  
絵美「(笑う) 膨らんでるから？」  
小御門「膨らんでるから」  
絵美「でも、ほっぺは膨らむよね？」  
小御門「膨らませ……？膨らませ、よう？としたら、膨らむよね？」  
絵美「え？なに？」  
小御門「だから、膨ら、ませ」  
絵美「もういいよ(笑)」  
小御門「え？(笑)」  
絵美「それが聞きたくて、今日呼ばれたの？私。違うでしょ」  
小御門「(かぶせ気味に) 受かったんだよね」  
絵美「……え？」  
小御門「ワークショップのオーディション。受かったかった」  
絵美「……へえ」  
小御門「受かったかったから、と思って」  
絵美「え……なんだろ。おめでどう？……って言えばいいのかな」  
小御門「ありがとう」  
絵美「……うん。え。おわり？」  
小御門「佐伯さんと、ご飯食べに行ったんだよ」  
絵美「……うん」  
小御門「あのー、オーディションの帰りに、絵美はさ、すぐ帰っちゃったけど。俺は、佐伯さんにLINEして、終わりましたーって、言って。そしたら、ご飯行く？みたいに、なつて」  
絵美「……うん。だから？」  
小御門「そういうとこ、なんじゃないの？」  
絵美「……え？」  
小御門「絵美に足りないのって」  
絵美「え？」  
小御門「だって、佐伯さんにチャンス貰ってる側でしょ。そうやってさ、すぐに帰るんじゃないかって、話聞いてくださいよーって、言うべきじゃない？」  
絵美「……」  
小御門「絵美はさ、恵まれてるから。最初の頃はしてただろうけど、ね。ちゃんとしないと」



絵美「……え？……私、今怒られてる？」

小御門「怒ってはないよ」

絵美「じゃあ、なに？」

小御門「絵美の事を思って」

絵美「(かぶせ気味に) だったら、何も言わないですよ」

小御門「……え？」

絵美「私のためとか言って、押しつけないですよ」

小御門「押しつけてるつもりはないよ」

絵美「言いたいだけでしょ。受かったって」

小御門「違うよ」

絵美「そうだよ。絶対」

小御門「俺はただ、純粹に、報告したくて。受かったら、絵美も喜んでくれるかなーって思ったから」

絵美「え？誰が喜ぶの？」

小御門「絵美が」

絵美「喜べないよ」

小御門「……え？」

絵美「喜べるわけじゃないじゃん」

小御門「でも、俺は、嬉しいよ。絵美が受かったら……」

絵美「私は、あなたじゃない」

小御門「……(溜息)」

絵美「……」

小御門「……駄目でしょ。こんなことで怒るの」

絵美「(財布を取り出して千円札を机に) 私帰るね」

小御門「(苦笑) 要らない要らない」

○12

回想シーン。

オーディション会場。

演技の審査が終わり、「今まで仕事を辞めようと思ったことはありませんか？」と質問をされ、

絵美「仕事を辞めようと思っただけ……」

少し間が空いて、

絵美「ずっと、だと思えます。あのー、履歴書見て頂いたら、わかると思うんですけど、売れかけたことも、特になくて。だから、ずっと、この仕事いつか、辞めないといけないのかーって、思って、きたって感じ、です」

続いて「では、どうして今も続けているのか？」と聞かれて、

絵美「……これしか出来ないから、これしか出来ることがないから……続けてる？んだけども思います。……（首を傾げる）。……（苦笑）ごめんなさい。嘘、いまついたかもしれないです」

少し間が空いて、

絵美「試してるんだと、思います。誰かに、やめろって言われるまで。……才能があるのかどうか、知ってから、やめたいって……思ってるのかな？すみません。なんか、あやふやな感じになってしまってます。でも、本当に思ってることは、こんな感じ？……です」

○13

絵美、マネージャーの佐伯に電話をかける。

少ししてから、電話つながって、

絵美「私、出来ないですか？」

少し間が空いて、

絵美「でも、落ちたんですよね。ワークショップのオーディション。落ちたんだったら、落ちましたって、言ってもらわないと。だって、小御門さんには言いましたよね。すぐ、合格したって、連絡したんですよね？」

少し間が空いて、

絵美「台本だって。……台本だって、私には言ってくれないと、とか、積極性がー、とか、言っちゃったけど、小御門さんには送りましたよね。すぐに。私が、佐伯さんに小御門くん紹介する時に、私言いましたよね。まだ、台本……まだ、ワークショップの、オーディションの台本、届いてないんだけど、どうなってますか。私が、見落としてますかって。言いましたよね。……言いましたよね？」

少し間が空いて、

絵美「でも、あれから、佐伯さんから全然連絡来なくて。私、本当に、忙しいからって思ってた。だって、佐伯さん、私と話すとき、いつも、いつも、忙しいって言うじゃないですか。

最近入った子がー、仕事いっぱい取ってくちゃうから、大変だって。だから、私は、忙しいのかなって思ったから！……私なんか、連絡しても、価値がないって知ってるから！」

少し間が空いて、

絵美「私、オーディション？受ける、一週間くらい？前に。佐伯さんに、どんな気持ちで受けたらいいか、とか、私の強み？とか事前に聞いておいて、そしたら、オーディションも上手くいくのかなって思ったから、電話しようとしたんですよ？……でも、いつも、忙しい、忙しいって言ってる、佐伯さんの顔が、浮かんで、かけるのやめて」

少し間が空いて、

絵美「そういうのが、あって、私は、電話するのやめようと思ったのに、オーディションの前日に、台本のこと？電話して聞いたら、佐伯さんは、積極性がーって。積極性がーって」

少し間が空いて、

絵美「佐伯さんが言ったんですよ。このオーディション落ちたら、もう仕事振らないからね。事務所も、辞めろとは言わないけど、仕事は、一切振らないから、自分で？どうするか、決めてって。……なんで、私が、決めないといけないんですか？」

少し間が空いて、

絵美「才能ないなら、ないって、言ってください。……佐伯さん。お願いします。本当に、お願いします。才能ないって、言ってください。そしたら……」

少し間が空いて、

絵美「そしたら……」

○14

文香、椅子を自分の部屋に運んでいる。

その途中で、上司から、電話がかかってくる。

文香「はい。もしもし。あ、お疲れ様ですー。……はい。……え！それ、ほんとですか？……はい。はい。そうですよね。えー、いや、それは全然気にしないんで。あー、すみません。（周りを見て）ちよつと書くものを……（ペンとメモ見つける）はい。大丈夫です。（書きながら）……はい。第二会議室……あ、三階の、はい。明後日から……わかり、ました」

メモを書きながら、

文香「あの、じゃあ、明後日からは……その、営業はー。あー、とりあえず、そうですよね。

……はい。私は……できれば、どちらも……はい。今まで通りには、できないとは思うんですけど。でも、私の本職は営業なので、そこは、はい。……はい。そうですよね。よろしくお願いしますー。失礼いたします」

文香、気を取り直して、椅子の部屋の真ん中らへんに置く。

文香「（座って）……。え。えー。マジで？」

少ししてから、

文香「……（スマホを探して）……（絵美に電話をかける）」

○15

絵美のスマホ、鳴っている。

絵美「（スマホの画面を見て、置く）……。……（悩んで、電話に出る）」

文香「絵美？あのさ、まさかのさ」

絵美「……うん」

文香「企画のコンペ通っちゃったんだけど！住宅展示場の。花火の。打ち上げ花火の！」

絵美「……そっかー。おめでどう」

文香「ありがとー。でも、なんだかんだ言って、通るとは思ってたから、今さっき電

話があつて知つたんだけど、めちゃくちゃ嬉しくて」

絵美「……そうだよね」

文香「うん。だから、思わず、絵美に電話しちゃった。考えてるの、絵美にしか言つてなかつたから。なんだろうー、喜んでもらえるかなーって思つて」

絵美「……うん。私も、嬉しい」

文香「……なんか、あつた？」

絵美「……え？ううん」

文香「なんか、元気ないみたいだから」

絵美「……うん。いつも、元気なわけじゃないから」

文香「……うん。そう、だよね」

絵美「うん」

文香「……大丈夫？」

絵美「大丈夫」

文香「……ほんとに？」

絵美「……うん」

文香「……私でよければ、話聞くよ」

絵美「大丈夫って言ってるよ。さつきから」

文香「……うん」

絵美「それだけ？」

文香「……うん。そう。コンペの話、だけ」

絵美「私、忙しいから」

文香「……そっか。ごめん」

絵美「うん」

絵美、電話を切る。

絵美、椅子に座らず、脱力する感じで、床に。

スマホも適当に、置く。

文香「(耳から離れたスマホを見て)……」

文香、居心地が悪くなって、壁に背を預けながら、ゆっくりと床に座る。

文香、椅子が少し邪魔で、横にずらす。

スマホを、画面が見えないよう床に接した状態で、置く。

文香「(思い立って)(絵美に電話をかける)……」

絵美「(スマホが鳴っているのを見て)……(無視する)……(でも、出る)……」

様子を伺っている、両者。

少ししてから。

文香「……話さなくてもいいから、電話してもいい？」

絵美「……うん」

文香と絵美、スマホを床に置く。  
スピーカーモードにしている。

文香「……（パソコンを取りに行く）」

絵美「……」

文香「（パソコン持ってきて、床に座る）……（作業を始める）」

絵美「……」

文香「（作業をしている）……（度々気になってスマホを見る）」

絵美「……落ちちゃった。……オーディション」

文香「……（考えて）……うん」

絵美「……どうしよう」

文香「……」

絵美「……やめないと、いけないのかな？」

文香「……」

絵美「私、嘘ついてた」

文香「……嘘？」

絵美「なんでこの仕事続けてるのって聞かれたとき、才能があるかどうか？確かめるために。  
やめろって言われるまで、続けてるって」

文香「……うん」

絵美「言ったんだけど……。ほんとは……知りたくない」

文香「……うん」

絵美「やめたくない」

文香「……うん」

絵美「なのにな、佐伯さん、マネージャーさんに、私って才能ありますか？って聞いてちゃっ  
た」

文香「……（考えて）うん」

絵美「ほんと、ダサイよね。……ほんとは聞く勇氣ないのに」

文香「……ごめんね」

絵美「……え？」

文香「なんにも、力になれなくて、ごめんね」

絵美「……ううん。そんなことない」

文香「私が、もしオーディション落ちたら、大分に来て手伝ってって言ったの覚えてる？」

絵美「……うん」

文香「本当は、嫌だったでしょ？」

絵美「……。……ううん」

文香「ううん。私が、嫌だったんだよ」

絵美「……」

文香「だって、絵美がこっちに来てくれても、それは、絵美がやりたいって思ってることじゃないから。……そんなことしなくていいんだよ」

絵美「……」

文香「みんなが大学卒業する時に、高校の？クラスのメンバーで、集まったの、覚えている？……覚えてないよね。だって、もう……5年以上も前だから」

絵美「……覚えてるよ」

文香「なんか、もうお開きかーみたいなタイミングで、由美がトイレから出てこなくなって」

絵美「……覚えてる。覚えてる。吐いちゃってね」

文香「うん。そしたら、小御門くんが、由美の席来て」

絵美「……そうだった？」

文香「なんか、私たち？三人が、謎に就職しない選択した変な奴らだからー、みたいな謎のノリで」

絵美「……うん」

文香「そしたら……誰か？が、私が、まかり間違って出世したら、引き上げてよ……みたい  
な」

絵美「……そうだった（笑）」

文香「うん。私、結構、真面目に……考えちゃって（笑）」

絵美「……うん」

文香「でも、それも、できなかったなーって」

絵美「……（考えて）ううん」

文香「……ごめんね。なんか、変な感じの話になっちゃって」

絵美「ううん」

文香「でも……なんだろう。勝手に、だし、絵美にしたら嫌だろうけど、すごい、ごめんって  
（笑）……思ってる」

絵美「……文香が、謝らないだよ」

文香「うん。そうだよね」

絵美「……」

文香「……そうだ。（椅子見て）部屋らしくなったよ」

絵美「……え？」

文香「椅子」

絵美「買ったの？」

文香「ううん。リビングの……」

絵美「え。もしかして、お母さんの？」

文香「……うん」

絵美「じゃあ、お母さん、夕飯とか……」

文香「立って食べてる」

絵美「やめなよ」

文香「ううん」

絵美「駄目だよ。かわいいそうだよ」

文香「でも、変だから。ずっと置いてあるの」

絵美「そっちの方が変だよ」

文香「……うん」

絵美「うん、じゃなくて」

文香「……うん」

絵美「……(笑う)」

文香「でも、今使ってない。椅子(笑)」

絵美「……(笑う)」

文香「……なに？」

絵美「……ううん(笑)」

文香「なんか言ってよ(笑)」

絵美「私も、今、使ってない」

文香「使いなよ……って言えない」

絵美「……私も、言えない」

○16

文香、会社の上司と電話をしている。

文香「(メモしながら)……来週の火曜日に、はい。わかりました。それは、あのコンペの時に使ったプレゼンの資料と……あ、そうですね。わかりました。作り直します。……

はい。あ、まだ、それは考えてないです。はい。ただ、金子さんから聞いたんですけど、明日、あの、企画部の方と一緒に会議……あ、はい。そうです。そうです。そこで、そういうことは、決めたほうがいいのかな、と思いましたが、はい」

少し間が空いて、

文香「大丈夫だと思います。はい。午後は営業をするような形で……あ、はい。もちろん。

一度出社した際に、はい、営業の方へ顔を出すように……はい。大丈夫かと思えます。はい」

○17

文香と絵美、電話をしている。

文香、パソコンで作業をしている。

絵美「ずっと気になってたんだけど」

文香「うん」

絵美「なんで、花火？打ち上げ花火？に、そんなこだわるの？」

文香「なんで？」

絵美「無理じゃない？」

文香「なんで？」

絵美「だって、コンペの時のプレゼン？のままじゃなくて、作り直してって言われたんでしょ？」

文香「うん」

絵美「それ、内容も変えてって意味じゃないの？」

文香「違うでしょ。ていうか、私だけで決めるんじゃないんで、これからは、その会社の企画する人たちと？一緒に会議して、やることになったから」

絵美「あ、その会議で、これからは決めていこうよ！的な」

文香「そう。決めていこうよ、的な」

絵美「で、その会議？で、花火のこと、なんか言われなかったの？」

文香「言われ……なかったよ。特に。それだけじゃないし、イベントは」

絵美「……言われないのも変じゃない？（笑）」

文香「インパクトはあるよねって」

絵美「え……それだけ？」

文香「うん」

絵美「……へー」

文香「え？なに？」

絵美「でも、私わかんないから、会社員？なったことないから」

文香「うん」

絵美「じゃあ、営業の仕事は、一端お休みにしてるってこと？」

文香「（かぶせ気味に）してる。してる」

絵美「……え？」

文香「あー、午前中は、そのー会議？に参加して、それからは普通に、いつもみたいに営業？の仕事してるよ」

絵美「それ、相談した？」

文香「相談っていうか、自分から、どっちもやりますって言って」

絵美「大丈夫なの？」

文香「大丈夫……だと思う。だって、そのー、ちゃんとやれば大丈夫だから」

絵美「結果？出してればーってことでしょ？」

文香「うん」

絵美「……（考えて）……そっか」

○18

数年前。大学卒業を機に集まった、高校の同窓会。



居酒屋。

同窓会が始まって、それなりの時間が経過している。

下手から順に、絵美、一つ空いて、文香が座っている。

下手の奥に、トイレがある（という設定）。

小御門がやってきて、絵美に、

小御門「（空いている席指指して）そこ座ってもいい？」

絵美「……駄目」

文香「（小御門をちらっと見る）……」

小御門「でも、空いてるじゃん」

絵美「そこ、由美の席だから……」

小御門「（座る）もう帰ったんじゃない？」

絵美「帰ってないよ。トイレだから」

小御門「あーそっか。でも、隼人たちは帰ったよ」

絵美「見たよ」

小御門「なんか、他の店行くみたいなの」

絵美「小御門くんはいいの？」

小御門「んーうん。だって、なんか、他の奴らと待ち合わせ？してるみたいだから」

絵美「……へえ、そうなんだ」

小御門「ていうか、時間的に大丈夫なの？なんか、時間決まってたよね」

絵美「んーそうなんだけど、由美のバイト先だから、ここ」

小御門「あー、そうなんだ。だから、ゆるいーみたいなの」

絵美「うん。まあ。そんな感じ」

小御門「でも、当の本人帰ったんでしょ？」

絵美「だから、帰ってないって」

小御門「トイレ？」

絵美「（トイレ見て）そう……でも、遅い、かも」

小御門「遅い？」

絵美「トイレ行くなって言ってから」

文香「（絵美をちらっと見る）……」

小御門「調子悪いとか？」

絵美「かも……大丈夫かな？」

文香「トイレ行くなって言ってから、5分？以上？経ってる、かも」

絵美「（少し驚いて、文香見て）あ、そうだよね」

小御門「見てきたら？」

絵美「うん……（席を立てて）」

○19

文香、上司と電話している。

文香「あー、今私、午前中は会議に参加してまして……あ、あの企画のコンペで、はいい機会を頂いて、そうなんです。あー、そうですね。朝礼は今まで通り、参加しているので、そこで、はい。わかりました」

メモを取りに行つて、

文香「来週の月曜日……ですか？（メモを書きながら）あー、はい。大丈夫だと思います。午後ですよ。はい。……はい、もちろん参加します。14時から……はい。わかりました。……いえいえ、大丈夫です。全然。はい。自分からやろうとしていることなので……はい……」

○20

時系列は、18の続き。

小御門と文香がいる。

絵美が帰ってきて、

小御門「どうだった？」

絵美「なんか、大丈夫って聞いても……大丈夫って（座る）」

小御門「結構飲んだ？」

文香「んー、うん。でも、そんなに飲んでないかも」

絵美「でも、お酒あんまり得意じゃないから」

小御門「あ、そうなんだ。お酒得意じゃないのに、居酒屋でバイトしてるんだ」

絵美「なんか、大学生っぽいからーみたいな」

小御門「なんか、とげあるね。その言い方」

絵美「ないない」

文香「でも、その大学生っぽいからーのおかげで、貸し切りでも安くなってるんですよ？」

小御門「……すごいとげあるー」

絵美「……あ（トイレ見る）」

小御門「え？なに？」

絵美「ううん。何でもない」

小御門「絶対なんかあったでしょ」

絵美「だから、ない（トイレちらっと）って」

文香「なんか変だよ」

小御門「ねー、なんか隠してない？」

絵美「……隠してはないんだけど」

小御門「だけど？」

絵美「……おー、みたいな」

文香「どういうこと？(笑)」  
小御門「あー、でも、言わんとしてることもわかったかも」  
文香「え。すごい」  
小御門「トイレと関係あるでしょ。あと、由美も」  
絵美「……」  
小御門「あ、凶星だな。これ」  
文香「なに？」  
絵美「……やめよ。やめよ。もう汚い話だから」  
小御門「あ……」  
文香「わかった？」  
小御門「げぼ、吐いてる？」  
絵美「……」  
小御門「げぼ吐いてる音が、聞こえた？」  
絵美「……」  
文香「あ、凶星だ」  
小御門「なんか、すごいわかりやすいよねー」  
絵美「だって、嫌じゃん。自分だったら」  
小御門「あんなとげある言い方してたの？」  
絵美「それは文香でしょ？」  
文香「でも、絵美もとげあったよ」  
小御門「大学生っぽいからー貸し切りでもー安くなったんでしょーって、ね」  
絵美「それ私じゃない」  
小御門「いいから、替わろう。俺と」  
絵美「え？」  
小御門「席替え」  
絵美「え。絶対しない」  
小御門「だって、あんまり仲良くないんでしょ？由美と」  
絵美「一言もそんなこと言ってないんだけど」  
小御門「ずっと席替えしたかったんじゃないの？」  
絵美「だから、そんなことないって」  
小御門「いいから。いいから」  
絵美「えー」  
無理矢理、小御門、絵美と席替えをする。  
小御門「(集中している)……」  
文香「……聞こえた？」  
小御門「あ、ちょっと、待って。集中してるから」

絵美「集中しないでいいよ」  
小御門「……」  
絵美「……」  
文香「……」  
小御門「……あ！」  
文香「聞こえた？」  
小御門「聞こえたー」  
絵美「(溜息) 最悪なんだけど」  
文香「どんな音だった？」  
絵美「聞かないでよ」  
小御門「あ、交換する？」  
絵美「しないから」  
文香「交換する」  
絵美「え？」  
小御門「(席立って) やっぱりね。生で聞いたほうがいいから、こういうのは」  
絵美「(少しかぶせて) ……私のせいだ」  
小御門、文香と席替え。  
文香「……」  
小御門「……」  
絵美「……この時間なに？」  
小御門「静かに」  
文香「……あ！」  
小御門「聞こえた？」  
文香「聞こえたー！」  
絵美「え。なんで、嬉しそうなの？」  
小御門「え？どんな音だった？」  
文香「なんか……なんだろ。……地獄？」  
小御門「わかるー」  
絵美「ねえ。そろそろ、大丈夫って聞きにいかないよ」  
小御門「パフォーマンスでしょ？」  
絵美「違うから」  
小御門「でも、あともう一回だけ、いい？」  
絵美「私に許可求めないでよ」  
小御門「最後はさ、みんなで聞こうよ、一回」  
絵美「えー」  
小御門「いいから」

一同、文香の席に集まって、

文香「……」

絵美「……」

小御門「……あ、くる」

少し間が空いて、

一同「おー！」

○21

仕事から帰ってきたばかりの、文香。

椅子に座ろうと思ったとき、上司から電話がかかってくる。

文香「……はい。もしもし。お疲れ様……あ、はい。今から、やろうと思っ

内容については、今朝の会議で、大方決まったので、そうですね。あとは、来週の火曜日のプレゼンに合わせて、資料を作っていく、といった流れ……で」

少し間が空いて、

文香「……え？金子さんから、来週の火曜日にプレゼンって……え。それっていつ変更になりました？私には、共有されていないんですけど」

メモを取り出して、

文香「……はい。それ、今朝の会議の時に……そうですね。いや、それは金子さんのせいとかそういうことではなくて……はい。……え。となると、資料っていつ頃に完成していれば、いいんですか？」

少し間が空いて、

文香「……はい。来週の月曜日となると……そうですね。事前に確認してもらわないといけないというか、私が不安なので、はい。もちろん会議で内容のほうは共有できている、とは思うんですけど、……でも」

少し間が空いて、

文香「私としては……はい。そちらの方が、助かります。……では、今週の金曜日……明後日に、資料が、完成……ってこと、ですよ。わかりました。……大丈夫かは（苦笑）すみません。完成できるかどうかにかかっているのです。そうですね。頑張ります。はい。

失礼します」

電話を切る、文香。

電話で聞いたスケジュールをメモに書いていく。

文香「……（来週の月曜日の予定が被っていることに気づく）……あ」

別の上司（金子）に電話をかける、文香。

文香「あ、お疲れ様です。すみません。確認なんですけど……来週の月曜日の、14時から、その営業部の方で会議を……そうですね。もちろん、参加するつもりだったんですけど……その今、企画の方から、プレゼンの日程が、変わったと伝えられて……はい。いや、

私も今さっき聞かされたばかり……で」

少し間が空いて、

文香「……はい。なにか手違い？があつたのか、はわからないんですけど、その今朝の会議でもその日程？は共有されていなくて……すみません。なので、その、そちらの会議の日程を、変えることは難しいと思うので、後日共有して頂くことは可能ですか？」

少し間が空いて、

文香「……はい。私としては……はい、もちろん、参加は是非したいですし……はい。え？その、私だけの都合で……すみません。そうですね。はい。……わかりました。……明日の……午前ですか？」

少し間が空いて、

文香「すみません。午前中は変わらず、企画の方で会議なので……はい。すみません。……はい。わかっています。……でも、その、そちらを優先したいというわけではないんですけど、明後日までに資料を作成しないと……そうですね。……わからないですよね」

〇22

時系列は、20の続き。

小御門、絵美が座っている。

小御門「(そわそわしている)……(スマホを見る)」

絵美「(気づいて)……(小御門を見る)」

小御門「(気づいて)……ん？……あ、枝豆の皮ここだから(皿を絵美の前に)」

絵美「枝豆じゃなくて」

小御門「え？」

絵美「なんか時間大丈夫？」

小御門「大丈夫だよ」

絵美「でも、なんか、そわそわしてるよ」

小御門「え？そう見える？」

絵美「……見える」

文香、帰ってくる。

絵美「(気づいて)あ、どうだった？大丈夫だった？」

文香「全然意識はちゃんとしてたから、住所、タクシーの人に自分で言ってもらって、その

まま」

絵美「そっか。よかったよかった」

小御門「お金は持ってるの？」

文香「あ、実家暮らしだよね？」

絵美「うん。由美は、そう。だから、大丈夫じゃない？なかったら親が」

文香「時間は大丈夫？結構経ってるけど」

小御門「あー、なんか言われそうだったら、追加で注文した」  
文香「あー、そっか」

絵美「でも、そろそろって感じだよね」

文香「うんうん」

小御門「でも、なんか、残るタイプなんだね」

文香「あ、私が？」

小御門「そうそう」

絵美「うん。なんか意外だった」

文香「それ言ったら、絵美も残ってるの意外じゃない？」

絵美「あー、私すぐ帰るからね」

小御門「今日は？」

絵美「あー、なんか、(トイレ指指して) 由美？のことがあったから」

小御門「なんか、トイレ指指して、由美って言うの、笑うね」

文香「笑う」

絵美「なんとなく指指しただけで(笑)」

小御門「あのさ、あのー、こないだ養成所の卒業のネタ見せ？みたいなのがあって(スマホで動画を見せる) ちょっと見て欲しくて……」

文香「へー、見たい見たい」

絵美「(にやにやしている)……」

小御門、動画を二人に見せる。

文香「(真剣に見ている)……」

小御門「(二人の様子をうかがいながら)……」

絵美「(にやにや)……(笑ってしまう)」

小御門「え？どこが面白かった？」

絵美「ううん」

小御門「いや、教えてよ。意見が欲しいから」

絵美「ネタじゃなくて」

小御門「……え？」

小御門、動画の再生、止める。

絵美「さっきまで、そわそわしてたの、これなんだなって思ったら……(笑う)」

文香「なに？」

絵美「なんかね。文香が由美のことしてるときに」

小御門「違うから」

絵美「絶対そうでしょ」

文香「なに？」

絵美「そわそわしてたの。スマホとか見ちゃって」

文香「そわそわ？」  
絵美「うん。たぶん文香に、自分のネタ見て欲しくて」  
文香「え(苦笑)」  
小御門「だから、違うって。ていうか、そわそわしてないし」  
絵美「でも、見て欲しかったんでしょ？」  
小御門「もちろん、見て欲しいとは思ってたよ(※)。だけどそわそわは」  
絵美「(※から)ほらー」  
文香「そうなの？(笑)」  
小御門「いやだって、緊張するでしょ？」  
文香「わかるわかる」  
絵美「でも、たぶん準備してたよ。文香いないとき」  
文香「え？(笑)」  
小御門「してないって」  
絵美「だってさ、すぐ動画出せたの、変だったでしょ？」  
文香「確かに(笑)」  
小御門「いや、だから」  
絵美「なんか、意外と繊細だね」  
文香「(ほぼ同時に)繊細(笑)」  
小御門「(ほぼ同時に)繊細とか関係ないでしょ」  
絵美「だってさ、見てくれるかなーって思いながら、動画準備して」  
小御門「うるさいなー」  
絵美「で、そわそわしてたんでしょ？」  
文香「そわそわ(笑)」  
小御門「いいよ。それで。もう」  
文香「認めた？」  
小御門「あのさ、俺はちゃんと見て欲しくて、なのに」  
絵美「ほんとごめん。面白くて」  
小御門「ネタ見て言って欲しいんだけど、それ」  
絵美「だから、ごめんって」  
文香「あとで送ってよ。動画のリンク」  
小御門「うん……なんか、ごめんね」  
文香「ううん。全然全然」  
小御門「絵美にも送るからね」  
絵美「うん。見るー」  
小御門「嘘くさいなー」  
絵美「見るって」



○23

絵美、電話をしている。

絵美「……え。本当ですか？」

少し間が空いて、

絵美「……はい。わかりました。明日、取りに行きます。はい」

少し間が空いて、

絵美「事務所の話は……あの、今したくはないです。その、今の感情的に、勢いで？決めたくはないので。はい。後日……わかりました。はい」

電話を切る、絵美。

絵美「……（椅子に座る）……」

絵美、文香に電話をかける。

○24

時系列は、22の続き。

小御門と文香がいる。

文香「（ちょっと気まずい）……」

小御門「（皿を文香の前に置いて）枝豆の皮、ここだから」

文香「あ、うん（苦笑）。ありがとう」

絵美、トイレから帰ってくる。

絵美「え、でも、文香が脚本家になりたいって知らなかったー」

文香「なんで、トイレから出てきて、それ言うの？（笑）」

絵美「なんか、結構……」

小御門「インパクトあった？」

絵美「うん。おーって思った」

文香「おーって（笑）」

絵美「だって、なかなか選択じゃない？私、なんも言えないけど」

小御門「俺も言えない」

文香「……そうだよね」

絵美「え？小御門くん、知ってた？」

小御門「知ってたよ」

絵美「あ、私だけ知らなかった感じ？」

文香「違う違う。聞かれたら、言う、みたいにしてるから」

小御門「そうそう、俺が聞いたから、知ってるっていう」

絵美「あ、聞いたんだ」

小御門「聞いた。聞いた」

文香「結構、なんか、序盤に聞かれた」

絵美「え？いきなり？」  
文香「いきなり、将来どうすんの？みたいな（笑）」  
絵美「何そのお父さんみたいな」  
小御門「……あ」  
絵美「なに？」  
小御門「あれさ、店長さんだよね？」  
絵美「うんそうそう」  
小御門「……」  
文香「なんかあった？」  
小御門「なんか、注文しないのに、まだ帰らないの？みたいな顔してる」  
絵美「まあ、そうだよ」  
文香「（スマホ見て）もう帰ろうよ。そろそろ」  
絵美「そうだねー」  
小御門「あ、でも。トイレ行っていない？」  
絵美「いいよー」  
小御門「あ、でも……げぼ感ある？」  
文香「なにげぼ感って（笑）」  
絵美「なかった」  
小御門「えー」  
絵美「ていうか、女子トイレじゃないでしょ？」  
小御門「あ、そっか」  
小御門、トイレに行く。  
絵美「（見送って）……なんか、変だよ」  
文香「なんなんだろうね」  
絵美「理由わかんないんだけど、なんか変だよ」  
文香「うん」  
絵美「……」  
文香「……」  
絵美「（文香の前に皿が移動していることに気づいて）……あ（笑）」  
文香「なに？」  
絵美「枝豆の皮こだからねって言われた？」  
文香「言われたー（笑）」  
絵美「なんだー、誰にでも言ってるんだー（笑）」  
文香「なんか、相槌みたいな感じなんじゃない？」  
絵美「え？（笑）……枝豆の皮、相槌なの？」  
文香「取りあえず、言っとけば当たる、みたいな」

絵美「なにそれ(笑)」  
文香「わかんないけどね」  
絵美「でも、なんか、ちょっとモテようとしてる感あるよね」  
文香「ある(笑)」  
絵美「……あるでしょ」  
少し間が空いて、  
絵美「でもさ」  
文香「うん」  
絵美「最初、こういうことやりたいですーみたいなこと、言ったら、どんな反応された？」  
文香「反応？」  
絵美「そう。私はもう高校の時に、女優になりたいんですけどーって言っちゃったから……  
そう。なんか、新しく？言ったらさ」  
文香「取りあえず、びっくりされるよね」  
絵美「だよ。ファンタジーだもんね」  
文香「ファンタジーかー。確かに」  
絵美「なんか、文香だったら、大丈夫だよーみたいなこと言われない？」  
文香「言われた。今日」  
絵美「でしょ？」  
文香「あれ、なんか、怖いよね」  
絵美「わかる」  
文香「なんか、大丈夫じゃなかった時のこと、考えてくれない感ある」  
絵美「あー、だから、怖いのかー」  
文香「なんか、助けてくれないんだろーって(笑)思う」  
絵美「でも、わかんないもん」  
文香「ファンタジーだから？」  
絵美「うん(笑)」  
文香「今はさ、大丈夫だけど……」  
絵美「うん」  
文香「いつか、話とか、合わなくなるのかな？」  
絵美「あー(笑) どうなんだろ」  
文香「……うん」  
絵美「不安？」  
文香「……うん。ぶっちゃけ、不安」  
絵美「でも、なんだろ。文香は、大丈夫だと思うよ？」  
文香「……(苦笑)」  
絵美「ごめん。なんか流れる的に、嫌味にしか聞こえないよね？」

文香「うん(笑)」  
絵美「でも、なんか……」  
文香「うん」  
絵美「根拠は、ある」  
文香「あるの?(笑)」  
絵美「だって、なんか、ちゃんとしてるじゃん」  
文香「薄くない?根拠」  
絵美「ちゃんとしてるっていうか、そう。堂々としてる」  
文香「そうかな?」  
絵美「なんか、これしかないって思ってる?」  
文香「これしかない?」  
絵美「私には、これしかないんだって」  
文香「んーうん。思っちゃってる」  
絵美「だから、大丈夫だと思う」  
文香「……絵美は?思ってるの?」  
絵美「……私も……思ってる」  
文香「思ってるんかい(笑)」  
絵美「うわ、ツッコミ(笑)」  
少し間が空いて、  
文香「じゃあ、私たち、大丈夫ってこと?」  
絵美「うん」  
文香「……そっか。大丈夫か」  
絵美「でも」  
文香「……でも?」  
絵美「もし文香がドラマの脚本書くときは、私の名前挙げて欲しい」  
文香「それ結構私売れないといけないじゃん」  
絵美「なんか、それとなく、でいいから」  
文香「それとなく?(笑)」  
絵美「うん。それでいいから(笑)」  
文香「じゃあ、絵美が売れたら」  
絵美「私も文香の名前出す。文香の書いた台詞しか言えないって言う」  
文香「全然それとなくないじゃん」  
絵美「……でも、私も結構売れないといけないじゃん。それ」  
文香「そうだよ。多分それなりの女優になってないと、言えないよ。そんなこと」  
絵美「そっかー」  
文香「頑張ってるよ」

絵美「うん」  
文香「私も頑張るから」  
絵美「うん」  
文香「……うん（笑）」  
絵美「じゃあ、大丈夫じゃん」  
文香「……うん」

○25

時系列は、23の続き。

文香、床に座って、仕事をしている。

絵美、椅子に座って、文香に電話をかける。

文香「（焦っている）……（気づく）……（電話に出る）」  
絵美「ねー」  
文香「ん？」  
絵美「受かっちゃった」  
文香「……何に？」  
絵美「舞台」  
文香「……あ、他にもオーディション受けてたんだ」  
絵美「違う違う。直接名前挙げてくれて、決まった。仕事。やばくない？」  
文香「……すごいじゃん」  
絵美「で、脚本誰だと思う？」  
文香「有名？」  
絵美「うん。すごい有名」  
文香「私知ってる？」  
絵美「私が、教えてもらった」  
文香「……え？……ほんとに？」  
絵美「やばくない？」  
文香「……うん」  
絵美「今さっき連絡もらったんだけど」  
文香「よかったね」  
絵美「うん。ほんとに……」  
文香「……うん」  
絵美「……（様子をうかがっている）」  
文香「……」  
絵美「……なんか、疲れてる？」  
文香「んー、うん。……なんか、明日までに資料作らないといけなくなって」

絵美「……全部、一人で？」  
文香「……え？あー、うん。資料は、私が作らないと。内容は会議で決まったことだから」  
絵美「……そっか」  
文香「でも、一人でやってるわけじゃないから」  
絵美「うん」  
文香「……いい？もう？」  
絵美「……うん。ごめん。忙しいのに」  
文香「ううん。話すことがないなら、切りただけだから」  
絵美「……うん。あのさ」  
文香「うん」  
絵美「文香も、脚本書いたらいいじゃん。また」  
文香「……なんで？」  
絵美「やりたいこと折角あるのに……なんか、もったいないじゃん」  
文香「……うん」  
絵美「だって、人生何があるか、わかんないよ。ほんとに」  
文香「……そうだね」  
絵美「だから……なんだろ。私は、文香に、やりたいことやって欲しい」  
文香「……うん」  
絵美「だってさ、やりたいことがあるってさ、そもそもすごいことじゃん」  
文香「これも、やりたい仕事なんだけど」  
絵美「……うん」  
文香「うん、じゃなくて」  
絵美「……ごめん」  
文香「すぐ謝らないでよ」  
絵美「……」  
文香「絵美ってさ、そういうところあるよね。……自分のことさ、空っぽとか言ってたけど、ただ見せられないだけじゃん。嘘つかないと」  
絵美「どういう意味？」  
文香「そんなに、今の私って痛々しい？」  
絵美「……言ってるないけど」  
文香「思ってるじゃん」  
絵美「……え？」  
文香「私、この仕事やりたいから、頑張ってるだけなんだけど。勝手に、仕事つらいのに、頑張ってるみたいな言い方？やめてよ」  
絵美「違う。ただ、大変そうだったから、頑張って欲しくて」  
文香「違う」

絵美「……」

文香「ずっと思ってたんでしょ？この人、やりたくない仕事やってる。やりたくないことは違うのになって。なんでさ、今になって言うの？なんで、自分が上だって思えないと、言ってくれないの？」

絵美「……」

文香「なんか言ってよ」

絵美「……文香が、これしかないって、脚本しかないって思ってるって話、してたから」

文香「うん。したね」

絵美「じゃあ私が、勘違い？してただけなんだね」

文香「変わるから。人は。どんどん」

絵美「……でも、それ、私にはわからないから」

文香「そうだよ。だって、全然連絡取ってなかったから」

絵美「……うん」

文香「これしかないって思ってたけど、それも、勘違いだったんだよ。だから、今の仕事してる。それに、絵美にはわからないと思うけど（※から）企画の仕事も」

絵美「うん。わからない」

文香「……」

絵美「私には、わからない。会社員したことないから」

文香「うん。そうだよ」

絵美「……うん」

文香「わかんないよね」

○26

喫茶店。

絵美が先に来ている、待っている。

遅れて、小御門がやってくる。

小御門「(座って)ごめん。待った？」

絵美「ううん」

小御門「こないだも、ごめんね」

絵美「ううん。佐伯さんは？」

小御門「あー、うん」

絵美「今日、佐伯さんに会いに来ただけど」

小御門「もうすぐ来ると思う」

絵美「ほんとに？」

小御門「ほんとほんと」

絵美「(疑っている)……」

小御門「舞台決まったんでしょ？」

絵美「うん」

小御門「野島伸司さんの？」

絵美「うん」

小御門「すごいよねー」

絵美「どうかな？」

小御門「忙しくなりそうだよねー」

絵美「小御門くんだって、そうでしょ？」

小御門「いや(笑)ワークショップだってさ、月一だし。それ以外何もないし」

絵美「そっか」

小御門「俺さ、勘違いしてたんだよね」

絵美「ん？」

小御門「半年間のワークショップって聞いてたから、それこそ舞台の稽古みたいにさ、みっちり？週1くらいあるイメージだったから」

絵美「そっか」

小御門「でも、蓋開けたら、月一」

絵美「うん」

小御門「笑っちゃうよね。笑っちゃうでしょ？」

絵美「でも、チャンスはあるでしょ？」

小御門「どーかなー？」

絵美「……」

小御門「絵美がさ、あんなに必死に、ワークショップのオーディション？臨んでたから、めっちゃチャンスある感じなのかなって思って、それなりに頑張ったのに。蓋開けてみたら、これでしょ？」

絵美「合格しない方がよかった？」

小御門「かもねー」

絵美「……そうかな？」

小御門「うん。絵美、なんて言ったの？オーディションで」

絵美「え？」

小御門「他のグループだったからさ、俺見てないから。参考にしたいなーって思って」

絵美「でも、落ちたから」

小御門「でも、仕事もらったでしょ？」

絵美「……佐伯さん、まだかな？」

小御門「え？教えてくれないの？」

絵美「教えないとかじゃなくて、参考にならないから」

小御門「へー。(スマホを絵美に見せて) ほら、見て」



絵美「(嫌そうに) …… (スマホを見る)」  
小御門「ほら。気づかない？」  
絵美「なに？」  
小御門「ほら、膨らんでるでしょ？ほっぺ。」  
絵美「……」  
小御門「絵美がさ、紹介してくれなかったから、インスタで調べてさ。やっと見つけて。撮ってもらって。だから、宣材写真に使おうかなーって」  
絵美「……佐伯さん、まだ来ないの？」  
小御門「来ないよ」  
絵美「……え？」  
小御門「俺が連絡しないと来ないよ」  
絵美「……え？」  
小御門「事務所辞めるって聞いたよ」  
絵美「……うん。だから、その前に、佐伯さんが話したいって言うから」  
小御門「うん。そうだよね」  
絵美「連絡して」  
小御門「違うんだって」  
絵美「連絡して」  
小御門「佐伯さんから、説得しろって言われてんの」  
絵美「……誰が？」  
小御門「俺が。意味わかんないよね」  
絵美「意味わかんない」  
小御門「でも、俺、佐伯さんから、仕事もらってるから」  
絵美「だから？」  
小御門「考え直してくんない？事務所やめるの」  
絵美「……え、嫌だ」  
小御門「また、切り捨てんの？」  
絵美「……またって、なに？」  
小御門「俺にさ、事務所紹介しておいて、やめんの？」  
絵美「……え？」  
小御門「まだ、俺さ。預かりだからね。入れてないんだから」  
絵美「だから？」  
小御門「頼れるの、絵美と佐伯さんしかいないんだから」  
絵美「だから、私に残れって言ってるの？」  
小御門「そう」  
絵美「……私、帰る」

小御門「うわ。そうやって、文香も見捨てたんだ」

絵美「……なんで、文香の話になるの？」

小御門「絵美さ、まだ解散ライブ見てないでしょ？」

絵美「え？」

小御門「俺がさ、渡したじゃん。DVD」

絵美「見たよ」

小御門「見るって言ったじゃん」

絵美「だから」

小御門「文香は、わざわざ観に来てくれたからね」

絵美「……え？文香が？」

小御門「なのさ、終わったたら、適当な感想言って、渡してきて。脚本。俺に出て欲しいって（笑）あのさ、俺の解散ライブなんだけど。俺がネタ書いてんだけど。どうかしてるでしょ」

絵美「……」

小御門「だから、絵美に頼めばって。そしたら、連絡取ってないから、気まずいこと言  
い出して。馬鹿にされてんだよねー。俺」

絵美「……もういい？」

小御門「絵美のせいだからね。言っておくけど。絵美が、見捨てたぶん、こっちが面倒みた  
いといけないの？処理しないといけないの。わかってる？」

絵美「（帰ろうと鞆を持つ）」

小御門「待ってよ」

絵美「待たない（財布を出して、払おうと）」

小御門「いいの？それで。事務所やめていいの？そんな甘くないんじゃないの？結構でかい  
事務所でしょ。だって」

絵美「自分の価値は、自分で決めるって決めたから」

小御門「は？なに価値って」

絵美「じゃ（席を立つ）」

小御門「（席を立つ）待ってよ」

絵美「（距離を取って）見捨てたの、そっちだから。見限ったのは、そっちだから。仕事渡  
さないから、とか、積極性とか。もう全部、自分で決めるから！」

小御門「それ、佐伯さんの話でしょ？」

絵美「うん（立ち去ろうと）」

小御門「待ってよ。俺だって、つらいんだよ。怖いんだよ！どうなるのか、わかんないんだ  
よ。だから……」

絵美「（少し迷う）……」

小御門「だって俺さ、実家金ないから」

絵美「関係ないでしょ」

○27

文香、会社の企画部の人と電話をしている。

文香「……すみません。あのー、先ほどお送り頂いた資料の件なんですけれども……はい。プレゼンの資料です。あれ……私の作ったものと、違うんですけど（苦笑）。……いや、なんか、全体的に違うじゃないですか？……そうですね」

少し間が空いて、

文香「確かに、今朝の会議には参加できませんでした。営業のほうから、こっちを優先して欲しいと言われてしまったので。だから、小池さんに、渡しましたよね。私が作ったプレゼンの資料、今日の会議で共有して欲しいって。……でも、共有された資料が」

少し間が空いて、

文香「小池さんが作ったんですか？……いつからですか？……小池さんが言ったんじゃないですか。私に作れて。それに、私言いましたよね？……事前に、確認して欲しいって。これで、大丈夫って、小池さんが、言ったんですよ？」

少し間が空いて、

文香「どうして、私には共有されないんですか？プレゼンの日程、変わったのも、私知らなかったんですよ？それなのに、平然と毎日会議だけして。……え？」

少し間が空いて、

文香「……今、なんて。……え？……知らないです。聞いてないです。……誰ですか？誰から聞いたんですか？」

文香、電話を切る。

文香、上司（金子）に電話をかける。

文香「……。……（考えて）私が、プレゼンに参加できないってどういうことですか？」  
少し間が空いて、

文香「小池さんから聞きました。参加させないって、金子さんが言ったって……。……どうなってるんですか？……説明してください。説明してください！」

金子から電話を切られる。

文香「（気づいて）……え？……なんで？……なんで！？」

文香、何度も、金子に電話をかけてゆく。

文香「（金子に電話をかける）（スマホを耳に）……（出ない）」  
を、繰り返し返す。

金子は出ない。

○28

絵美、台本を読みながら、台詞を覚えている。

文香、何度も電話をかけ、疲れている。  
絵美、立っている。

文香、床に脱力した感じで、座っている。

文香のスマホ、画面を伏せた状態で、床に置かれている。

絵美のスマホは、机に。

文香、手を伸ばし、スマホを取って、

文香「……（すがるように、絵美に電話をかける）……」

絵美「（集中して、台詞を歩きながら、覚えている）……（着信に気づいて）……（スマホを見る）……」

文香「（不安になってくる）……」

絵美「（出ようと思うが、小御門から貰った解散ライブのDVDが入った紙袋が目につく）

……（少し迷って）……（スマホの画面を伏せ、机に置く）……（少し気になって）……

（でも無視）……（打ち消すように、仕事に戻る）」

文香「（まだ待っている）……（でも無駄だと気づき）……（もう一度電話をかけようか迷って）……（諦める）」

絵美「（台詞を覚えながら）……（少しスマホを気にする素振り）……（でも、仕事に戻る）」

文香「……（スマホをできるだけ自分から遠ざけた位置に、伏せた状態で置き）……（徐々に体を小さくするような感じで、膝を抱え）……（うつむき）……（少しだけ、椅子に目を向け）……（顔を膝にうずめる）」

○29

時系列は、24の続き。

同窓会が終わった翌日くらいの話。

文香と小御門、電話をしている。

小御門「え？なんだっけ？」

文香「昨日、同窓会で、卒業公演？のネタYouTubeに上がってるから見て、みたいな話、してたじゃん」

小御門「え？誰が？」

文香「小御門くんが」

小御門「え？（笑）そうだっけ。全然覚えてない」

文香「……ほんとに？（苦笑）」

小御門「うん、全く、全然、覚えてない」

文香「ひどくない？（笑）」

小御門「え。でも、見てくれたんだ。ほんとに」

文香「だって、昨日言ってたから」

小御門「え。ありがとう。え。どうだった？率直に」

文香「面白かった、よ」  
小御門「えー。でもさ、俺らの後の奴らの方が面白かったでしょ？見た？」  
文香「あー、なんかめっちゃ速度あったやつ？」  
小御門「そうそう。あれ、すごいよねー。特待生で入学してさ。で、そのままトップで卒業して。だから、あいつらが最後？その、ネタ見せしてただけど」  
文香「あ。卒業公演？の順番って、成績順なの？」  
小御門「あ、そうだよー」  
文香「じゃあ、小御門くんも凄いじゃん。最後から2番目」  
小御門「そうだっけ？」  
文香「さすがにそれは覚えてるでしょ（苦笑）」  
小御門「ネタは？どうだった？ネタ」  
文香「あれって、誰が書いてるの？」  
小御門「あ、俺、俺」  
文香「あ、そうなんだ」  
小御門「うんうん」  
文香「へー……」  
小御門「文香も、おんなじ書き物？してる身として、なんか、意見とかアドバイスとか、聞いてもいいかなーみたいなの」  
文香「でも、私ネタは書いてないから」  
小御門「んー、ネタも脚本も同じでしょ？」  
文香「んー、……うん」  
小御門「そうでしょ（苦笑）」  
文香「あのー、実は、書いてみて」  
小御門「あ、書いてみるんだ」  
文香「ファイル送ってもいい？」  
小御門「え？（苦笑）書いてみるんでしょ？」  
文香「あ、違う違う。もう書いた。書いてみたって、感じ」  
小御門「え？何を？」  
文香「ネタ。参考までに、って感じだから」  
小御門「え？俺が、ネタ書いてるって言ったじゃん」  
文香「うん。だから、参考までに、と思って」  
小御門「え（苦笑）ありがとう？」

○30

28から、数ヶ月（半年くらい）経過している。

絵美、仕事から帰宅する。

絵美「(少し疲れている) …… (椅子に座る) …… (読まないといけない台本を手にする)  
(実際に読んでみるが、眠たくなってくる) …… (気分を変えようと、水を台所から持  
ってきて、飲む) …… (花火の音が聞こえたような気がして) (立って、窓のほうへ)」

絵美、スマホを手にとって、文香に電話する。

文香、部屋の掃除をしている。

文香「(着信に気づいて) (周りをキョロキョロと) …… (ポケットを触ったり) …… (スマ  
ホ見つからない) …… (一度部屋を出て、スマホを持って帰ってくる) …… (電話に出る)」

絵美「(気づいて) …… 文香？」

文香「うん」

絵美「…元気？」

文香「うん」

絵美「…そっか」

文香「どうかした？」

絵美「ううん。なんか、用事があった、とかじゃないんだけど」

文香「…そっか」

絵美「(窓を見て) あ」

文香「ん？」

絵美「なんか、花火の音するんだよね」

文香「花火？」

絵美「うん。結構、離れたところから、なのかな？なんか、銃声みたい」

文香「そうなんだ」

絵美「すごい久しぶり…だね」

文香「うん」

絵美「半年？くらい？…連絡取ってなかったから」

文香「うん」

絵美「…うん」

文香「忙しかった？」

絵美「んー、うん。仕事が良い感じ？で」

文香「そっか」

絵美「文香は？」

文香「んー、特に」

絵美「…今は、何してた？」

文香「掃除？」

絵美「掃除？」

文香「そう、掃除してた(掃除を再開する)」

絵美「そう、なんだ」

文香「がさがさってして」  
絵美「え？」  
文香「さっき、どこかわかんないんだけど、がさって音がして」  
絵美「へー、なんだろう」  
文香「うん」  
絵美「ゴキブリとか？だったらやだね」  
文香「あー、そうかも。でも」  
絵美「じゃあ、やじゃん」  
文香「でも、だから、掃除したんだよ」  
絵美「……あ、がさって音したから？」  
文香「そう。だから、掃除始めて……忘れてた。理由」  
絵美「大丈夫？（笑）」  
文香「うん」  
絵美「……」  
文香「ずっと探してるのに」  
絵美「……そうなの？」  
文香「全然見つからない」  
絵美「気になる、よね」  
文香「うんー。昼に一回がさって言うってから、ずっと、探してるのに」  
絵美「……え？」  
文香「水場とか、怪しいのかな？」  
絵美「昼から、ずっと、探してるの？」  
文香「うん」  
絵美「……そうなんだ」  
文香「うん」  
絵美「……そっか」  
文香「変だよね」  
絵美「……ううん」  
文香「でも、気になるから」  
絵美「う、ん。でも、一回休憩したほうがいいよ」  
文香「駄目だよ」  
絵美「でも、ご飯とか食べた？食べてる？」  
文香「夕飯はまだ」  
絵美「一回やめて……」  
文香「駄目だよ」  
絵美「……えっと、なんで？」

文香「だって、気になるでしょ？」

絵美「うん。だけど、ずっと、何時間も」

文香「だって、気になって、安心できないじゃん。ちゃんとしないと」

絵美「……んー、だけど」

文香、掃除している最中に、椅子を倒してしまう。

絵美「(驚く)」

文香「だから、駄目なんだって。こういうのは。見つけた時に、気づいた時に、やらないと。

必要ないのに、見逃しちゃ駄目でしょ。排除しないと。社会に必要なものなんだから」

絵美「(驚いたまま)……」

文香「(気づいて)……ごめん。うるさかった？(椅子を直す)」

絵美「……ううん。……ちょっと、びっくりした」

文香「……ごめん」

絵美「……」

文香「……」

絵美「……なんか。そうそう、うちの近くでも、花火が見れるんだけど」

文香「……うん」

絵美「ほんとに、部屋の窓から、見れて」

文香「……うん」

絵美「……そう。ごめん。なんで、この話したんだろ？(笑)」

文香「今見てるの？」

絵美「ううん。今は音だけだから。でも、地元のその花火？も、たぶん一週間後？ちょうど

一週間後くらいに、やると思う。毎年やってるから」

文香「聞こえる？」

絵美「ん？」

文香「花火」

絵美「……あー、うん。今も聞こえてるよ。なんだろ(笑)ばーんって」

文香「私は、聞こえない」

絵美「んー、電話だから、聞こえないかも。あと距離あって、そんな音しないし。だから、

ほとんど振動で感じてますって、感じ」

文香「いいな」

絵美「文香、好きだもんね。花火」

文香「うん」

絵美「なんで？」

文香「なんでだろ」

絵美「あ、理由とかはないんだ(笑)」

文香「うん。……でも」



絵美「うん」  
文香「喋らなくていいから、かも」  
絵美「……なにそれ(笑)」  
文香「だって、見る時は、話さないでしょ？」  
絵美「話したくないってこと?(笑)」  
文香「感想が違うのが、なんかやだ」  
絵美「……感想？」  
文香「花火見たら、みんな、きれいー、しか言わないでしょ？」  
絵美「……うん(笑)」  
文香「それが、安心する」  
絵美「……なるほど」  
文香「変だよね」  
絵美「……ううん」  
文香「……でも」  
絵美「うん」  
文香「お母さんは、うるさいって」  
絵美「(笑う)……うるさい?」  
文香「うん。うるさいんだって」  
絵美「そっか(笑)」  
文香「うん……」  
絵美「……。なんか、欲しいものとか、ある？」  
文香「え?」  
絵美「ごめん。話いきなり変えて」  
文香「ううん」  
絵美「来週、誕生日だよね」  
文香「あ……そっか」  
絵美「だよね」  
文香「……うん」  
絵美「私、人の誕生日覚えるようになったタイプの人間だから」  
文香「そうなんだ」  
絵美「うん。最近になってんだけど」  
文香「うん」  
絵美「なんか、そういうの、大事なのかなって。人として？」  
文香「うん」  
絵美「まあ、いまさらーって感じなんだけど」  
文香「そうかな?」

絵美「だから、欲しいものあるかなーって。なんか、それとなく、わかったらいいんだけど」  
文香「……」

絵美「なんか、あったり、する？」

文香「絵美の欲しいものが、欲しい」

絵美「……え？」

文香「……」

絵美「私の、欲しいものが、欲しいの？」

文香「……うん」

○31

時系列は、30から数分後。

絵美、スマホを机に置いて、

絵美「……私の欲しいもの？……なに？」

絵美、部屋を見回す。

絵美「……（小御門から以前にもらった紙袋が気づく）……あ。（紙袋を開いてDVDを出す）……あ、見てない。解散ライブ」

絵美、DVDを持って、椅子に座って、

絵美「（机に広がっている台本を避けて、DVDを再生する）……（ちょっと飽きてくる）……（台本を手にとって、読み始める）……（時々気になって画面を見る）（が、しばらくして、視線は台本に）……（音声だけは聞いている）……（思わずにやっとしてしまう）……（それを隠したくて、台本を画面の前に持つてくる）……（でも、ちょっと面白い）……（渋々、台本を机に置いて、ちゃんと見始める）……（にやっとする）」

○32

文香、部屋の掃除をしている。

文香「（掃除をしながら、何かを探している）……（音がした気がする）……（急いで文香は殺虫剤を取りに行つて、帰つてくる）……（音はもう聞こえないから、耳を澄ます）……（先ほどの音はない）……（椅子の下を見る、いない）……（少しずつ気になるところから、殺虫剤を噴射）……（次第に、気になるところは増えていき）……（咳き込みながら、噴射していく）」

○33

数ヶ月前。

小御門の解散ライブ。

終演後の小さめの劇場（もしくは公民館のホールみたいなどこ）。

客席で、面会をしてくる人を待っている、小御門。

周りを気にしながら、立っているが、一向に、面会者は現れない。

小御門「(少し離れたところで、相方が誰かと楽しそうに話しているのを、気にしている)

……(下をうつむいて)」

少しして、文香が、近づいてくる。

文香「(様子をうかがっている)……」

小御門は気づいていない。

文香「(小御門かどうか、少し自信がないが、声をかけようと)……小御門くん？」

小御門「(少し驚いて)……え？」

文香「あ、小御門くんだよね」

小御門「え。あ、うん」

文香「なんか、大丈夫？」

小御門「ん？あー、大丈夫。大丈夫」

文香「……」

小御門「なんか、さっきまで、連続で、挨拶してくれる人が来て」

文香「うん」

小御門「そうそう。今は、ちょうど……なんか、波みたいなの、あるじゃん。その、なに。

人流？ってさ」

文香「そう、なんだ」

小御門「そうそう。だから、今だけ、波静まってるから、大丈夫。今だけ暇だから」

文香「そっか……(苦笑)。やっぱり解散ライブ、だからーとかあるのかな？」

小御門「あー、でも、いつもこんな感じだよ？」

文香「へー」

小御門「普段からインタラクティブだから」

文香「あ、へー」

小御門「でも、来てくれるとは、思わなかった」

文香「だって、解散するって聞いたら来るでしょ。普通」

小御門「でも、誘ってないじゃん」

文香「……うん」

小御門「なんで？」

文香「え。だから、解散するって聞いたから」

小御門「他になんか、理由があるのかなって」

文香「……ないない、別に」

小御門「……へー」

文香「なんか……変わった？」

小御門「え？」

文香「小御門くん。なんか、前会ったときと、違うから」

小御門「え？（苦笑）ていうか、マジで、数年ぶりとかだよね？」  
文香「うん。同窓会から、だからー、そうだね」  
小御門「そりゃ、変わるでしょ」  
文香「……うん。そっか」  
小御門「変わらないのも、だって、おかしいって思うでしょ？」  
文香「んー、うん」  
小御門「……なに？文香だって、変わったでしょ？」  
文香「どう、かな？」  
小御門「変わってないってことは、成長してないってことだからね」  
文香「……じゃあ、成長してないかも（苦笑）」  
小御門「それは知らないけど」  
文香「うん。そうだよね」  
小御門「……」  
文香「……あのさ（鞆から脚本が入ったファイルを取り出して）良かったらなんだけど」  
小御門「（引いている）……」  
文香「（気づいて）ん？」  
小御門「……（ファイルを顎で指して）なにそれ？」  
文香「実は、脚本書いてて」  
小御門「……」  
文香「ネタとかではないんだけど」  
小御門「……え？」  
文香「ん？」  
小御門「あのさ、俺、言ったよね？なんか、他に理由はあるのかなって。言ったよね？」  
文香「……うん」  
小御門「あったじゃん」  
文香「……ごめん」  
小御門「嫌なんだよ、そういうの」  
文香「ごめん。だけど、私、来月から大分に行くことになって、だから」  
小御門「関係ないよ。そんなの」  
文香「……そうだよね」  
小御門「なんも、変わってないね」  
文香「……」  
小御門「前にも言ったと思うけど、俺ネタ書く側の人間だから。その時点で、その脚本？は受け取らないから」  
文香「……うん」  
小御門「前にも言ったと思うけど」

文香「……ごめん」

小御門「……」

文香「……」

気まずい、沈黙した時間。

文香、うつむいてしまう。

小御門「……あのさ(苦笑)」

文香「(顔を上げる)」

小御門「感想もないわけ？」

文香「……」

小御門「今日、観に来たわけでしょ。解散だからって、観に来たわけでしょ。え。そうだよ  
ね？」

文香「うん」

小御門「なんか、ないわけ？」

文香「……ごめん」

小御門「ごめんじゃねえだろって」

文香「……」

小御門「なんか、言えよ！」

文香「(小声)……面白かった」

小御門「え？」

文香「面白かった」

小御門「……(苦笑)きつも」

文香「……」

小御門「これは、俺からのアドバイスなんだけど、古い縁頼りすぎ。依存しすぎ。普通に、  
キモいから。だって、なんで、ずっと、高校の同級生に、大して仲も良くないやつに、脚  
本渡してんの？怖いよ。もはやー、さすがにー」

文香「ごめん」

小御門「なんか、文香と話しても、つまんないよねー」

文香「……」

小御門「なんかさ、俺がなんか言うと、ごめん。あ、ごめんって。よくそんなんので、脚本？  
書けるよね」

文香「うん。……うん(帰ろうと)」

小御門「(それを見つつ)……(髪乱暴に掻いて)あ、待って待って(近づく)」

文香「(立ち止まる)」

小御門「脚本のデータだけ、送って」

文香「……え？」

小御門「今送って」

文香「……なんで？」

小御門「だって、絵美にも連絡しようと思って、でも出来なくて、俺のどこに来たんじゃな  
いの？」

文香「……」

小御門「そうでしょ。絶対」

文香「……」

小御門「いいよ。だから、送って。俺が、絵美にも送ってあげるから。それでいいでしょ？」

文香「(迷っている)……」

小御門「いいなら、早くしょ」

文香「……(スマホで、小御門に脚本を送る)」

小御門「(スマホを見つつ)でもさ、文香もすごいよねー。いや、俺もさ、ネタ書いてる系  
の人間だから、わかるけど、脚本だと、なおさら、分量的にも？大変じゃん。なのにさ、  
書いてるわけでしょ」

文香「……」

小御門「一人だねー」

文香「……うん」

小御門「あ、あれもくんない？あのー、さっき持ってた、ファイル。脚本の」

文香「……あ(ファイルを小御門に渡す)」

小御門「ありがとー」

○34

時系列は、31から数日が経過している。

絵美、郵便局に電話をかけている。

机の上には、中くらいの段ボール。

絵美「(少し緊張している)あ、すみません。あのー、先日、そちらの、そのー、郵便局か  
ら荷物の発送をお願いしたんですけども……その、返ってきて、しまつて。そのまま。

……一週間前ぐらいに、はい、お願いして。あ、永田絵美です。……はい」

少し間が空いて、

絵美「住所は、間違っていないと思います。あのー、社宅なので。本人からも、引越しし  
たとは聞いていないので。……はい。すみません。お願いします」

絵美、電話を切る。

絵美「(段ボールを見る)……(心配になってくる)……(文香に電話をかける)……(出  
ない)……出ない。何でだろ。……あ(文香の勤務している不動産会社の電話番号を調べ  
る)……(番号わかる)……(かけようか迷う)……(でも、かける)」

電話を待つ、絵美。

少し緊張して、段ボールを触ったりしている。

絵美「あのーすみません。一つ、お伺いしたいことがあります……はい。そちらの、営業？の方に、勤務している、沖合文香って今……え。……いつ、辞めたんですか？……今連絡が取れていない状態で、本人と。……はい。すみません。そのー、住所とかってわかったりしますか？仕事辞めたあと、どうしてるとか……わかったり、しませんか？」

少し間が空いて、

絵美「……わかんないですよ。すみません。わかりました」

電話を切る、絵美。

絵美「……もう一度、文香に電話をかける……（出ない）……どうしよう。……（部屋を歩き回る）……（小御門に電話をかけようと思う）……（小御門に電話をかけてみる）」

小御門、電話に出る。

絵美「あのさ、文香と連絡が取れないんだけど」

小御門「え？なんて？」

絵美「文香と連絡が取れなくて、今」

小御門「なんでそれ、俺に聞くの？」

絵美「まだ連絡取り合ってるんじゃないの？」

小御門「取ってないけど（苦笑）」

絵美「でも、解散ライブ観に来た、みたいな話してたじゃん」

小御門「うん。観に来たけど（笑）それつきり、だし、別に」

絵美「じゃあ、なんか知らない？」

小御門「知らない」

絵美「勤務先に電話したら、とつくに辞めてるって言われて、本人とも連絡がつかないし、

どこにいるのかもわかんない状況なの。だから、何でもいいから」

小御門「え。仕事辞めたんだ（苦笑）」

絵美「なんか知らない？」

小御門「え。でも、大分じゃないの？」

絵美「……なんで知ってるの？」

小御門「話してたから。お母さん末期の癌で、もう助からないから、故郷に戻りたいって言われて、大分行くのな」

絵美「……え？いつ？」

小御門「だから、解散ライブの時に（笑）」

絵美「なんで、そういうの早く言ってくれないの？」

小御門「前にも言ったでしょ。俺は、聞かれないと言わないタイプの人間だからって」

絵美「もういい！」

絵美、電話を切る。

絵美「（もう一度、文香に電話をかける）……出て」

時系列は、33の続き。

場所は楽屋。

小御門が、演劇関係者の知り合いと電話している最中。

小御門「あ、じゃあ、今送ったんで。はい。よろしくお願いしますー。はい。失礼しますー」

電話を切る、小御門。

小御門、文香から渡されたファイルに入った脚本を、つまらなそうに、ざっと見てる。

文香から、電話がかかってくる。

小御門「(面倒くさそうにスマホ見て) ……(電話に出る) ん？」

文香「ごめん。今大丈夫？」

小御門「んー、うん。大丈夫ー」

文香「さっき言おうか迷ったんだけど」

小御門「うん」

文香「あれ、私が書いたネタだよね？」

小御門「……ん？何が？」

文香「解散ライブでやってたネタ」

小御門「え？ごめん。何の話？」

文香「YouTubeにもあげてるよね。私が、書いたネタ」

小御門「だから、何の話って」

文香「渡したでしょ。一回。同窓会の後、私が。ネタ書いて送ったよね？何パターンか」

小御門「それ何年前の話？(笑)」

文香「小御門くん。ネタ書けないんでしょ？」

小御門「……は？」

文香「他のライブでも、おんなじネタやってるでしょ。YouTubeも新作のネタ全然アップされないし」

小御門「え。違うんだけど」

文香「何年も前のネタ、繰り返してるじゃん」

小御門「だから、違うって言ってんじゃない」

文香「今さっき渡した脚本も、自分のものにするんでしょ？」

小御門「……は？」

文香「でも、いいよ。別に。それでもいいと思って、私渡したから。小御門くん」

小御門「……さっきから、なに話してんの？」

文香「私、お母さんが末期の癌で、もう助からないから。お母さんが、東京じゃなくて、故郷に帰りたいって言うから、来週から大分に行くんだよね。で、私ももう良い頃合いだと

思うから、普通に就職しようって、思ってる」

小御門「だから、何の話？(笑)」



文香「でも、最後に、書きたくて。脚本。だけど、小御門くんも言ってたけど、私人脈ないから。作ってないから。誰にも頼めなくて。ていうか、小御門くんくらいしかいなくて。だから、いいよ。私の脚本使って。小御門くんがさ、なんかやって。私、それ見るだけでいいから。……もう出来ないから」

小御門「……（苦笑）。あかさ」

文香「うん」

小御門「自分のこと、才能あるって思ってるでしょ？」

文香「思っていないよ」

小御門「思ってたかったら、自分で書いた脚本使っていいよ、なんか言えないでしょ」

文香「違う。私はもう続けられないから」

小御門「ていうか、じゃあ誰も、才能ないやつが書いた脚本、使わくない？」

文香「でも、小御門くんは使ってるよね？」

小御門「……」

文香「小御門くんだって、才能あるって思ってるから、続けてるわけじゃないでしょ？」

小御門「……」

文香「認めたくないから、続けてるだけでしょ？」

小御門「……え。今、俺に、才能ないって認めろって話、してる？」

文香「そういう意味じゃないよ」

小御門「え。そういう意味でしょ」

文香「じゃあ、大丈夫って言われたい？」

小御門「……」

文香「才能あるって言われたい？私に？言われたくないでしょ。信じられないでしょ？」

小御門「……」

文香「自分で、決めるしかないんだよ」

小御門「……」

文香「私は、もう才能ないって決めたんだよ。自分で」

小御門「だから？」

文香「だから、だからこそ、次は、ちゃんと、自分がしてる事が、誰かのためになってるって、社会のためになってるって思える仕事をしたい」

途中で電話を切る、小御門。

知り合いの演劇関係者に、もう一度、電話をかける。

小御門「あー、すいません。さっき俺が書いた脚本送ったじゃないですか。……いや、催促してるんじゃないくて。逆です。逆。もう、あれ読まなくていいです。はい。あれ、書いたやつ才能ないんで。……あ、そうですそうです。俺が書いたんです。すいません。間違えて。そうですよね。普通、そこは間違えないですよ。すいません。そうです。才能ないんで。才能ないのは……俺か（スマホを地面に投げる）……（脚本も投げ捨てる）」

小御門、すぐにスマホ拾う。

小御門、絵美に電話をかける。

小御門「(どこか慌てている)……あ、絵美?ごめん。突然電話かけて。めっちゃ久しぶりだよ。そうだよ。あのさ、どこかで会えたりしない?今度。いつでもいいから。どこでもいいから。夜じゃなくてもいいし。昼とかに、どっかの喫茶店でもいいし。そうそう。いや、なんか、事務所の話聞きたくて」

○36

時系列は、34の続き。

絵美、文香に電話をかけ続けている。

文香、椅子の上に立っている。

椅子の上には、首つり縄。

文香、口元を手で押さえている。

床に、沢山の殺虫剤が散らかっている。

スマホは、床に伏せられた状態で、置かれている。

文香「(スマホが鳴っていることには気づいている)……(意を決して、椅子から降りる)……(散らかった殺虫剤の中からスマホを発見)(すぐに、椅子の上に)……(口元を手で押さえたまま、電話に出る)」

絵美「文香!？」

文香「ごめん。出れなくて」

絵美「大丈夫?」

文香「うん」

絵美「なんかあった?」

文香「見つからない」

絵美「え?」

文香「かさかさって音が鳴ってるのに、見つからなくて」

絵美「……うん」

文香「だから、絵美は、ゴキブリかもしれないって言ったでしょ?」

絵美「……うん。言った」

文香「だから、殺虫剤買ってきて、ばーってやったんだけど、全然見つからなくて。だから、何度も何度もばーってやったんだけど、まき過ぎちゃって。逆に。今降りれない状態だったから」

絵美「……降りれないって、何から?」

文香「椅子から」

絵美「……椅子から?」

文香「だって、一杯まいちゃったから。殺虫剤。だって、吸っちゃ身体に悪いでしょ。だか

ら、だけど、上の方の空気は新鮮だからと思って」  
絵美「……窓は？窓、開けたほうがいいんじゃない？」  
文香「開けないよ」  
絵美「……なんで？」  
文香「だって、逃げちゃうじゃん」  
絵美「……うん。だけど」  
文香「大丈夫だよ。心配しなくても。私、今、新鮮な空気吸ってるから」  
絵美「うん。だけど、危ないから」  
文香「大丈夫だよ。落ちたりしないから」  
絵美「……そうじゃなくて」  
文香「何が、かさかさ言ってるんだろう……？殺虫剤じゃ効かないのかな？」  
絵美「ねえ。文香」  
文香「ん？」  
絵美「……仕事やめた？」  
文香「うん。やめたよ」  
絵美「お母さんは？」  
文香「死んだよ」  
絵美「私に、話してよ。そういうこと」  
文香「だって、絵美は忙しいから」  
絵美「でも、話してくれないと」  
文香「駄目だよ。絵美は、諦めてないんだから」  
絵美「え？」  
文香「駄目だよ。私なんか、邪魔したら」  
絵美「邪魔なんかじゃないよ」  
文香「ありがとう」  
絵美「……なんで、ありがとうとか言うの？」  
文香「だって、電話かけてくれたから」  
絵美「かけるよ。だって、心配だったから」  
文香「間違い電話でもかけてくれたし」  
絵美「それは、ごめん。だけど、間違えて、よかったなって私、すごい思ってる」  
文香「うん。私も思ってる」  
絵美「うん」  
文香「……あ」  
絵美「ん？どうかした？」  
文香「私、わかつちやったかも」  
絵美「え？」

文香「さっき私が、動いたら、かさかさって言った」  
絵美「……文香」  
文香「さっき、スマホ取りに椅子から降りたときに、かさかさって言った気がする」  
絵美「文香」  
文香「私じゃん」  
絵美「待って」  
文香「ん？」  
絵美「文香、どこにいる？」  
文香「え。だから、椅子の上」  
絵美「だから、どこにいるのって。引越したんでしょ」  
文香「うん」  
絵美「だから、どこ？」  
文香「ううん」  
絵美「ううんじゃなくて。教えて。ちゃんと」  
文香「駄目だよ」  
絵美「どうして？」  
文香「逃げちゃうじゃん」  
絵美「逃げていいんだよ！」  
文香「……」  
絵美「逃げたいって思ったら、逃げていいんだよ」  
文香「……駄目だよ」  
絵美「駄目じゃない」  
文香「……ほんとに？」  
絵美「ほんとだよ」  
文香「ほんとに？」  
絵美「うん。東京？東京にいる？」  
文香「ううん」  
絵美「どこにいる？」  
文香「……」  
絵美「教えて。文香」  
文香「どうして？」  
絵美「今から行くから」  
文香「駄目だよ」  
絵美「なんで!？」  
文香「絵美は忙しいから」  
絵美「忙しくないから。もう公演も終わって、次の稽古まで、お休みあるから。大丈夫だか

ら」  
文香「……」  
絵美「文香？聞いてる？」  
文香「駄目」  
絵美「どうして？」  
文香「こんな私、見せられない」  
絵美「ううん。大丈夫。絶対に、大丈夫」  
文香「来て欲しくない」  
絵美「……わかった。行かないから。行かないから」  
文香「……うん」  
絵美「……だから、このまま話せる？行かないから」  
文香「……うん」  
絵美「……前に、うちの部屋の窓から、花火が見えるって話、したの覚えてる？」  
文香「うん」  
絵美「うん。……で、それが、今日だった。今まで忘れてたんだけど」  
文香「うん」  
絵美「うん。で、それが今日の20時から、なんだけど」  
文香「うん」  
絵美「文香の、部屋に、時計あったりする？」  
文香「うん。あるよ(※)(スマホから耳を離して)(椅子から降りる)」  
絵美「(※)じゃあ、椅子から降りなくていいから、時間教えてくれたりする？」  
文香「(スマホ耳に付けて)あ、今」  
絵美「うん」  
文香「19時58分。ぎりぎりだ」  
絵美「うわ。すごいギリギリだね」  
文香「うん」  
絵美「前にさ、文香がさ、花火の音聞きたいって言ってたでしょ？」  
文香「うん」  
絵美「で、前は、距離が離れたから、駄目だったんだけど。今日の花火は、めっちゃ、うちから近いから、スマホを、窓に向けたら、聞こえると思うんだよ」  
文香「うん。じゃあ、聞こえる？」  
絵美「うん。聞きたい」  
絵美「うん。だから、しばらく、そのまま電話出来たり、する？」  
文香「うん。できる」  
絵美「よかった。じゃあ」

文香「あ、59分」

絵美「お。じゃあ、そこじゃ危ないから、椅子から降りられる？」

文香「……え？」

絵美「どうかした？」

文香「もう降りてる(椅子の上に行こうと)……(殺虫剤とぶつかって、音が鳴ってしまふ)

あ

絵美「どうかした？」

文香「鳴ってる」

絵美「文香？」

文香「かさかさって今、鳴った」

絵美「大丈夫だから」

文香「私が動いたから……」

絵美「文香？もうすぐ花火だから。聞こえるから」

文香「……」

絵美「もう花火、上がると思うから、一回、スマホ、耳から離すからね」

文香「(椅子の上の、首つり縄を見ている)……うん(※)。……離す(スマホを床に置く)」

絵美「(※から)じゃあ離すね(スマホを耳から離して、窓に向ける)」

文香「(椅子の上に)……」

絵美「もうすぐだと思うから」

文香「(縄に手をかけて)」

絵美「なんか、めっちゃでかい花火だから。期待してて」

文香「(縄に首を入れて)」

絵美「なんか多分全部で5分くらいなんだけど(※)めっちゃ、なんていうの、そのーぎつしりしてて。ずっと花火上がってるの。だから、煙たくなっちゃってたりするんだけど、それが、なんていうの、それも、味みたいになってる……」

文香「(※から)私は、大丈夫だから(首を吊る)」

絵美「前にさ、文香が、感想が同じで安心するから、花火が好き、みたいな話、してたじゃん。あれさ、あの時は反応悪くしちゃったんだけど、なんか、分かる気がする。なんか、映画とかもさ、感想を交換して楽しいよねーみたいな時と、これ感想交換したら絶対喧嘩みたいになるなって映画もあったりするじゃん。だから、そういうことなのかなって思ってた。文香が言ってたことって。だから、私、わかったよ」

少し間が空いて、

絵美「そう、小御門くんの解散ライブも、最近見たんだよ。いや、渡されたの、結構前なんだけど。あのー、なんか、文香が誕生日プレゼント、私の欲しいものが欲しいって、言ってくれたから……入れてやろうと思って。解散ライブのDVD。全然私が欲しいものじゃないんだけど。だけど、なんか、あんまり認めたくないんだけど、意外と面白くて」

少し間が空いて、

絵美「……あれ。なんで、始まらないんだろう。もう20時になってるよね。なんかあったのかな……聞こえてる?」

少し間が空いて、

絵美「(スマホ耳につけて)……文香。聞こえてる?」

○37

現在。

絵美が、花火大会の運営者に電話をかけている。

絵美「そのー、昨日の花火が延期されて、今日、開催されることになっていと思うんですけど。……はい。そうですね。なので、中止にして欲しくて。……はい。中止です。延期とかではなくて、普通に、はい。中止。打ち上げ花火とか、打ち上げなくていいんで(笑)」

少し間が空いて、

絵美「だって、昨日の時点で、延期って決まっちゃったか?決まっちゃってないですよ。私、確認しましたよ。そちらの、公式のTwitter。昨日の朝。そしたら、普通に、昨日の夜、花火やりますって書いてたじゃないですか。そうですね。で、中止ですってツイートされたの21時ですよ。それ、おかしくないですか?20時の時点で、できないんだったら、その時点で、っていうか、事前に発表できますよね?」

少し間が空いて、

絵美「現地ではアナウンスしてましたって。え、花火って、現地に行かないと見れないんですか?違いますよね。私みたいに、家から花火が見える人だっているんですよ。そうやって、楽しみに待っている人がいるんですよ。そういう人たちって、例外なんですか?違いますよね」

少し間が空いて、

絵美「今日見れますから、大丈夫ですよって何ですか。……今言っちゃったじゃないですか。今日、見れるから大丈夫ですよーって。そうじゃないでしょ。昨日見れなかった人だって、いて。……いるんだよ!なんで、切り捨てんの?なんで平気で無視すんの?なんで、そういう人は見捨てて、誰かを楽しませてあげようとか、偉そうに思っちゃってんの?……なんで、そうやって簡単に、大丈夫とか言うの。何も知らないでしょ。知らないくせに、わかるうともしてないくせに、大丈夫とか言わないでよ」

少し間が空いて、

絵美「全然わかろうとしてなかったじゃん。自分の相談ばっかして。人の話聞かないで。連絡も全然取らなくて。電話してくれたのに無視して。仕事が忙しいからとか、なんで相手に言わせてんの?……え?今、文香の話、してんの!全部自分のせいだって、わかってんだよ!」

少し間が空いて、

絵美「文香が死ぬ前、一瞬思ったんだよ。今、スマホから耳離したら、今私が声かけなかったら、死ぬかもしれないって。だけど……だけど、怖かったんだよ。なんて言われるのか、聞きたくなかったから。私のせいって言われるかもしれないから。私は、知ってて、文香が死ぬかもしれないって、知ってて……（電話を静かに切る）」

絵美、スマホを机の上に置こうとするが、段ボールがある。

スマホを置くのをやめ、逃げ出すように、キッチンへ。

水の入ったコップを持って帰ってくる。

絵美「（立ったまま、スマホを持ったまま、勢いよく水を飲む）……（途中でむせるが、それでも飲み続けようとする）……（咳き込んで、吐きそうになって、口元を腕で押さえるが、少量の水が床にこぼれる）……（拭かないと、と考えると）（机のほうを振り返るが、段ボールが目について、嫌になって、仕方なく床に置くことにする）……（急いでキッチンへと消えて）……（キッチンペーパーを持って帰ってくる）……（膝を床について、吐き出した水を拭く）……（拭いている最中に、文香に間違えて電話をして、焦ってむせて、同じように水を吐き出してしまい、拭いたことを、思い出す）」

完